古典芸能と番組・番付（ばんづけ）

―宣伝・案内・見立（みたて）―

図録

天明二年四月難波新地勧進能番組

今様能狂言辻番付

明和九年大坂中之芝居辻番付

宝暦九年竹本座役割番付

場所　神戸女子大学古典芸能研究センター展示室

期間　2019年3月11日（月）～4月25日（木）

土・日・祝日休室

時間　午前10時～午後5時

「古典芸能と番組・番付（ばんづけ）―宣伝・案内・見立（みたて）―」

能・狂言・歌舞伎・人形浄瑠璃などの古典芸能の興行や催しには、それを宣伝・案内するために、能・狂言では「番組」、歌舞伎・人形浄瑠璃では「番付」が作られてきました。また、遊び心に富んだパロディとして、見立番付の類いも多くに人々に親しまれてきました。古典芸能研究センターにも多数の番組・番付資料が所蔵されており、特に番組については、「能番組データベース」をホームページで公開中です。今回の展示では、古典芸能研究センターが所蔵する、中世芸能（能・狂言）と近世芸能（歌舞伎・人形浄瑠璃）の資料から、さまざまなタイプの番組・番付をわかりやすく紹介するとともに、そこから見えてくる興行や催しの特色についても解説します。

Ⅰ　能・狂言の番組

（１）能番組の歴史

能・狂言の現存最古の番組は、大乗院尋尊（だいじょういんじんそん＊）の日記の紙背に記された、『応永三十四年能番組』と呼ばれる演能記録です。応永 34 年（1427）２月に行われた興福寺薪猿楽のうち、同月 10 日に大乗院で演じられた観世座の曲名と演者（シテ）のみが記録されています。応永 34 年は世阿弥が出家してから、およそ５年後のことで、世阿弥の息子元雅らが観世座を支えている時期でした。室町時代前期には、この『応永三十四年能番組』のような、曲名とシテの名前のみを記載した簡略な番組が作られていたと推測されています。

こうした演能記録としての番組は、江戸時代にも大量に作成されました。戦国・安土桃山期の本願寺坊官で金春流の素人役者であった下間少進仲孝（しもつましょうしんなかたか）が、自身が出演した能の番組を記録した『能之留帳』や、享保６年（1721）から文久２年（1862）までの江戸城における演能を記録した『触れ流し御能組』は、その代表例と言えるでしょう。現在の番組の書式に近い、曲名とシテ以外にワキや囃子を記載した番組は、戦国期あたりから現れ始めます。

一方で、観能の案内や宣伝を目的とした番組も、江戸時代に作成されたものが大量に残っています。多くは書写番組ですが、江戸時代中期頃から、多数の観客が来場する勧進能において木版刷りの番組が作られるようになり、江戸時代末期頃には、町方の催しにおいても一枚刷りの能番組が数多く作成されました。木版刷りの能番組は、明治時代になり活版印刷の技術が日本に導入されると、じょじょに淘汰され、近代的な活版刷りの能番組が主流となっていきます。ちなみに、江戸時代の能番組に書写番組が多い理由は、神事能や勧進能以外の演能が、原則として関係者のみが集う私的な催しの場で行われたため、それほど大量の番組が必要ではなかったからだと考えられます。

なお、今回の展示のうち、「Ⅰ能・狂言の番組」で紹介した資料の一部は、「古典芸能研究センター蔵能番組データベース」（神戸女子大学古典芸能研究センターホームページ参照）においても公開しています。

＊大乗院尋尊…大乗院は興福寺の門跡寺で、一乗院と交互に興福寺別当職に就いた。別当は、東大寺や興福寺などの大寺院において寺務を統轄する僧官のこと。尋尊は、大乗院第 20 代門跡で、一条兼良の子。

（２）能番組の構成

能・狂言の番組は能組ともいい、曲名と演者が上演順に記載されています。江戸時代に幕府の式楽となってからは、五番立（ごばんだて＊）の能の配列を基準にして、「翁付（おきなつき）」と称して、冒頭（脇能の前）に《翁》を演じ、５番目の切能の後に祝言能（＊）を加え、能と能の間に１番ずつ狂言を入れ込む番組構成を最も正式とします。この番組構成の方法は、江戸時代における式楽以外の催しにおいても、多くの能番組の基準となっており、１日に能２～３番と狂言１番の組み合わせが一般的となった現代にも受け継がれています。

＊五番立…初番目物（脇能）・二番目物（修羅物）・三番目物（鬘物）・四番目物（雑物）・五番目物（切能）に分類された能作品から、曲籍ごとに１番ずつ選び、初番目物から順番に配列する番組編成法。現在では、五番立の番組は、めったに上演されないが、五番立を基準に演目の上演順を決めている。

＊祝言能…翁付五番立（おきなつきごばんだて《翁》と能５番の構成）の番組で、五番目の切能が終わった後に、祝言として演じる能。ちなみに、「付祝言（つけしゅうげん）」といって、最後の能の後に、めでたい内容の短い謡（うたい）を地謡が謡い、祝言能の代わりにすることがある。

（長田）

神事能・奉納能番組

神事能とは、寺社の祭礼・行事に付随して催される能・狂言のことです。能楽の長い歴史の中で、特に初期の猿楽は、寺社と深い関わりを持ちながら発展してきました。そのため、神事能は能・狂言の初期から重要な演能の場であったと言えます。同様に、神仏に献上される奉納の能・狂言も、猿楽が担う重要な役割の１つとして、古くから行われてきました。ここでは、神事能としての歴史が特に長い南都両神事能（興福寺薪能と春日若宮祭能）の番組を記録した資料や、京都で催された奉納能の番組を紹介します。

南都両神事能　（興福寺薪能と春日若宮祭能）

奈良を代表する神事能の春日若宮祭能と興福寺薪能では、古くから猿楽　（能・狂言の祖）が演じられてきました。中世に奈良に存在した大和猿楽４座　（＊）には、両神事能への参勤が義務づけられており、当時の猿楽座にとって重要な演能の場でした。室町時代末期になると、戦乱により両神事能は中絶状態となりますが、豊臣秀吉によって復興され、江戸時代にも引き継がれます。なお、江戸時代前期の寛文２年　（1662）に、幕府によって観世座を除く３座　（宝生・金春・金剛の３座）の２座交替制が定められ、観世座の南都両神事能への参勤はなくなりました。また、元禄期　（1688 ～ 1704）頃からは、大和国に領地のある金春座以外の大夫の参勤は減り、代わりに京阪や名古屋の弟子筋の役者が出演していました。

春日若宮祭能は、平安時代後期の保延２年　（1136）に始まった春日大社の摂社若宮社の祭礼で奉納される能です。室町時代以降、猿楽の役者による能は 11 月 27・28 日に行われました。江戸時代には、11 月 27 日の「松之下式　（まつのしたしき＊）」に、当番年の２座が金春座・金剛座の場合は「弓矢ノ立合　（ゆみやのたちあい＊）」、宝生座の場合は「船ノ立合　（ふねのたちあい＊）」を舞い、翌 28 日には、お旅所前の芝舞台で後日の能を上演しました。

一方の興福寺薪能は、もとは興福寺の修二会　（しゅにえ＊）に付随する催しとして始まり、おそくとも鎌倉時代前期には上演されたと考えられています。その後、人気のあった薪能が修二会から分離し、修二会の有無に関係なく２月に固定して行われるようになり、江戸時代に２座交代制が定められてからは、毎年２月５日から 13 日の７日間にわたって催されました。２座の能役者は、２月 7 日から 13 日まで行われる興福寺南大門前の能と、２月９・10 日に南大門の能の後に行われる春日若宮社頭での御社上　（みやしろあが）りの能に出演しました。

＊大和猿楽４座…結崎（ゆうざき）・外山（とび）・円満井（えんまい）・坂戸（さかど）の４座。それぞれ、現在の観世流・宝生流・金春流・金剛流の祖にあたる。

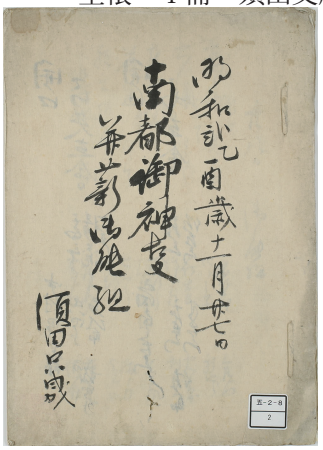
＊松之下式…春日大社大鳥居側の「影向　（ようごう）の松」の下で芸能が奉納される。

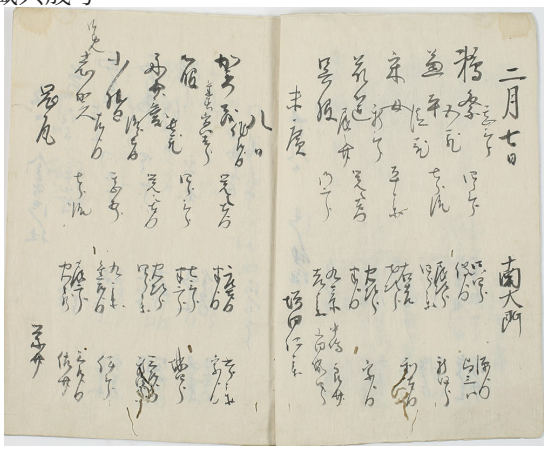
＊「弓矢ノ立合」「船ノ立合」…いずれも《翁》の特殊演式で、各座の大夫が相舞　（あいまい）で舞う。

＊修二会…毎年２月に行われる仏教儀式。旧年の穢れを払い、新年の平安を祈る。

Ⅰ－１. 明和二年南都御神事並薪御能組

堅帳　１冊　須田文蔵只晟写





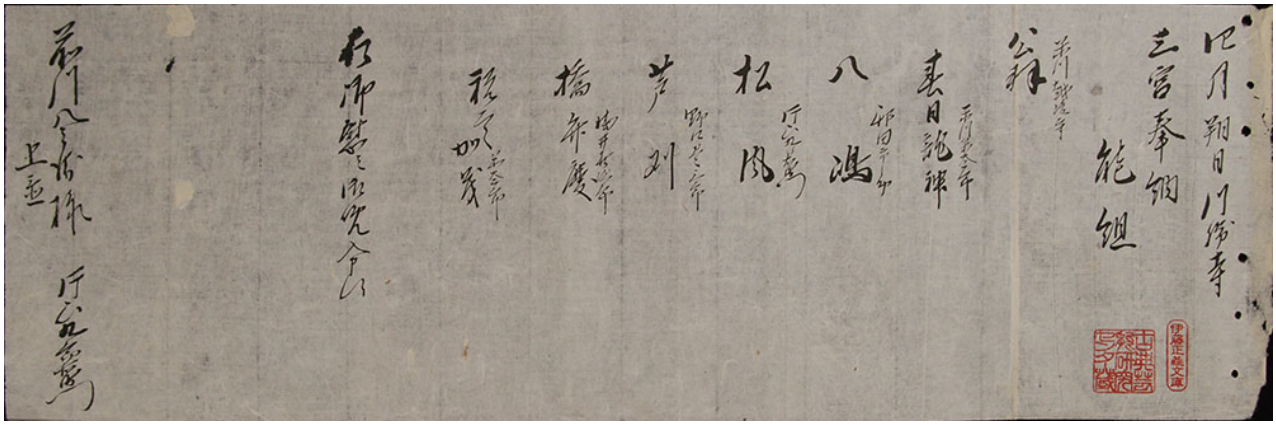
明和２年　（1765）11 月に行われた春日若宮祭能と、同３年２月に行われた興福寺薪能の番組を記録した冊子。書写者の須田文蔵只晟は、京都在住の謡方で、京観世五軒家　（＊）の１つ岩井家の高弟だった人物。明和７年に 34 歳で歿した。明和２年 11 月・同３年２月の両神事能参勤の当番は金春と宝生の２座であり、展示資料によると、この年の薪能は、２月 10 日が雨天のため順延され、同月 14 日まで催された。

（須田家伝来等野口氏旧蔵資料）

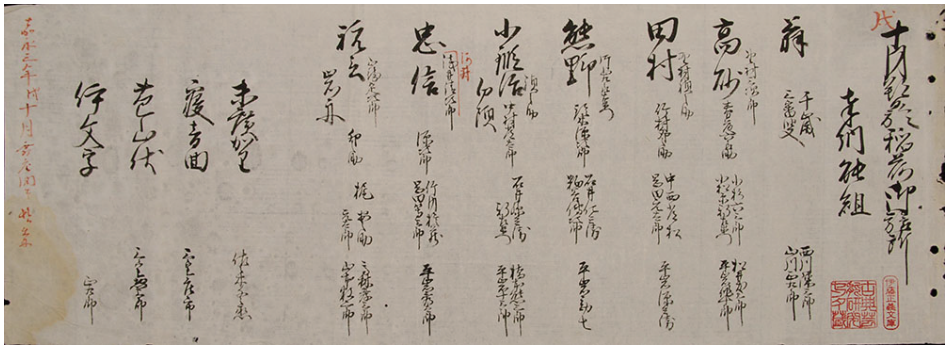
＊京観世五軒家…江戸時代に京都で発生した、素謡教授と地謡での出演を専門とする家々の総称。岩井七郎右衛門・井上次郎右衛門・林喜右衛門・浅野太左衛門・薗久兵衛の五家。京都の観世流の謡方を伝えた。

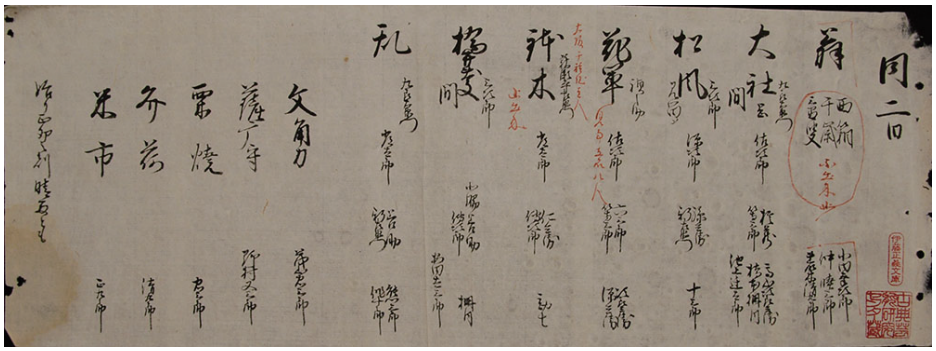
Ⅰ－２. 年不明四月朔日松尾三宮御旅所奉納能番組　　一枚物　写

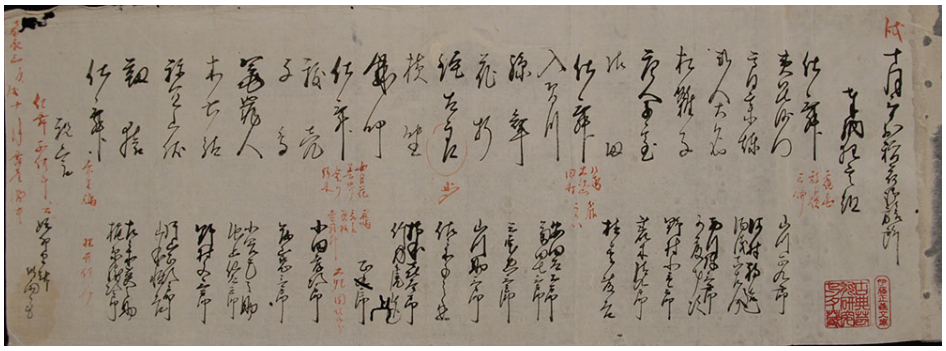
４月１日に松尾三宮御旅所　（現京都市右京区西京極北裏町）で奉納された能番組。翁付能６番が上演され、最後の演目は祝言能となっている。京都の川勝寺　（せんしょうじ）に位置する松尾三宮御旅所　（三宮社）は、松尾大社の末社で、現在も毎年４月に行われる松尾祭の御旅所の１つとなっている。番組本文に続けて「右御慰ミ御覧入申候」とあり、さらに末尾に「前川八兵衛様／上置　片山九郎右衛門」と記されていることから、４番目の能《松風》のシテを勤めた片山九郎右衛門が、自身が出演する奉納能番組を、番組の旧蔵者である前川八兵衛に送ったことが分かる。前川八兵衛は慶応３年（1867）歿らしく、この番組も幕末頃の書写であろう。（伊藤正義文庫蔵）



Ⅰ－3. 嘉永三年十月稲荷御旅所舞台開キ奉納能番組　　一枚物　3枚　写







嘉永３年（1850）に伏見稲荷大社御旅所（現京都市南区西九条池ノ内町）に能舞台が創建されたことを受けて、同年 10 月１から３日の３日間にわたって開催された舞台開きの能興行番組。初日と３日目の番組末尾に「嘉永三年戌十月舞台開キ　始而出来」「嘉永三庚戌十月舞台開キ」と朱書きがある。最初の２日間は翁付能６番・狂言４番（２日目は狂言５番）、最終日の３日目は狂言 18 番・仕舞 16 番が奉納された。

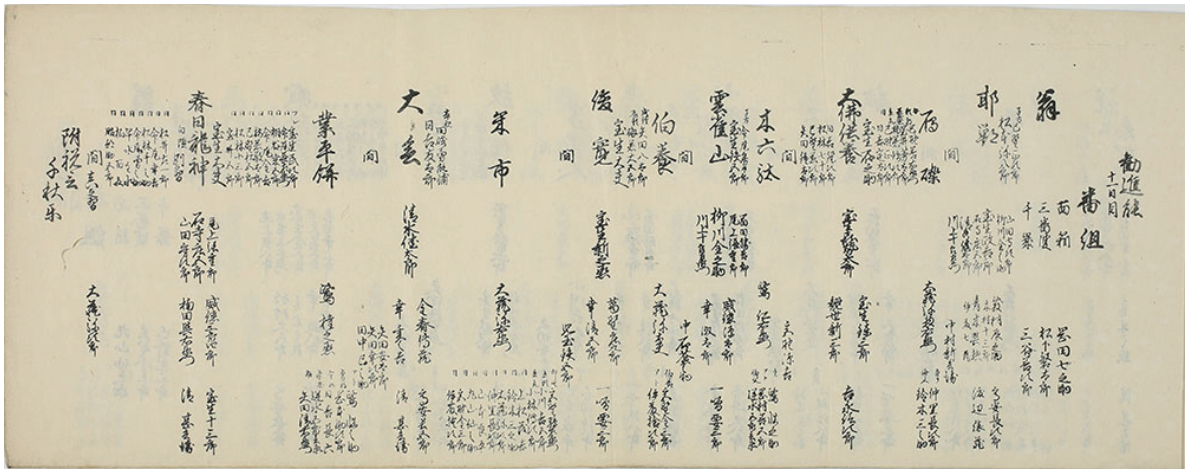
出演者は、シテ方の野村三次郎（金剛流）・片山九郎右衛門（５世豊尚　観世流）、狂言方の茂山忠三郎・山川正九郎（いずれも大蔵流）、三宅庄市・野村又三郎（いずれも和泉流）、小鼓方の糟谷伝次郎（幸流）、大鼓方の石井仁兵衛（石井流）など、京阪の名だたる役者が顔をそろえている。２日目番組の《翁》に「不出来止メ」、《花軍（はないくさ）》に「見事立衆八人」（＊）、《鉢木》に「上出来」と演能への評価が朱書きされるほか、役者の交替や仕舞の上演曲などについても朱で注記されている。この番組の旧蔵者である前川八兵衛が実際の舞台を観劇し、事前に渡された番組に書き込んだのであろう。（伊藤正義文庫蔵）

＊「見事立衆八人」…能《花軍》は稀曲で、草花の精に扮した立衆（シテツレ）が大勢出演する。

勧進能

勧進能とは、もともとは寺社の建立や修理に必要な費用を得るため、寄付金集めを名目に観覧料を徴収する興行を指しました。しかし、江戸時代になると、そうした興行は稀となり、主催者である役者が、観覧料による収益や名誉を得るために催される大規模な興行へと変化し、江戸・京都・大坂以外の地方都市にも興行地が拡大しました。そのうち江戸における勧進能は、徳川幕府お抱えの五座の大夫に１代に１度だけ許可される公的な興行であり、江戸後期においては、弘化５年（1848）の宝生大夫勧進能興行を含め４回しか行われていなません。一方、大坂では、五座の大夫以外のツレ方、ワキ方、狂言方、囃子方の役者が幕府の許可を得て大坂町奉行の関与のもと勧進能興行が行われました。大坂での勧進能は大きな収入源だったらしく、延宝２年（1674）から幕末までに 75 回も催されました。勧進能では、江戸中期頃から刷り番組が作られ始めたらしく、「弘化五年宝生大夫勧進能番組」（展示番号４）のような豪華な番組も販売されました。

Ⅰ－4. 弘化五年宝生大夫勧進能番組　　横長帳（折紙綴）　1冊　　弘化５年（1848）文花堂刊



弘化５年 （1848）２月から６月の晴天 15 日間に、江戸筋違橋 （すじかいばし）門外 （＊）において、15 世宝生大夫弥五郎友于 （ともゆき）が開催した一世一代勧進能の番組。

弘化五年宝生大夫勧進能の刷番組は、１日分の番組だけを印刷した一枚刷りのものと、15 日分の番組を１冊に印刷したものに大別され、さらに後者の番組は、初刷りと後刷りの２種類に分類できる。展示の番組は、そのうち 15 日分を１冊にした番組の後刷りに該当し、11 日目の番組に、初刷りでは抜けている狂言「伯養」の曲名と、《春日龍神》の小書「真之習」が追加されている。表紙には水色の五雲模様、裏表紙には灰色の変わり七宝模様が刷られ、表紙中央に「宝生大夫／勧進能番組」、表紙見返しに「弘化五戊申年従二月／於筋違橋御門外晴天十五日之間／勧進能興行／宝生大夫蔵板 （印「紫雲」）」、裏表紙に「開板所／江戸瀬戸物町／文花堂 （印「検家」）」と印刷されている。表紙は大和綴じで、緑色の綴じ紐は原装のままとみられる。弘化五年宝生大夫勧進能の刷番組は販売され、この勧進能を詳細に記録した斎藤月岑 （げっしん＊）筆『弘化勧進能絵巻』によると、値段は、一枚刷りの１日のみの番組が 16 孔 （こう）、15 日分の番組１冊が銀２匁 （もんめ）であった。

15 日間すべての番組が翁付能６番・狂言５番となっており、能の曲順はおおむね五番立に準じている。また、１日の最後に上演される能が祝言能でない場合は、必ず付祝言 （つけしゅうげん）が謡われた。ただし、実際の演能は番組通りには行かず、時間遅延や雨天の影響で、初日５番目の《大江山》と４日目６番目の《須磨源氏》が半能、９日目５番目の《紘上》と 15 日目４番目の《唐船》が省略された。出演者が詳細に記載され、地謡・後見を除く演者の姓名がアイに至るまで網羅されている。登場人物の大勢な曲が能・狂言ともに多く選ばれており、江戸以外の地方の弟子も参集しての興行であった。

徳　川幕府 11 代将軍家斉・12 代将軍家慶はともに宝生流贔屓であり、優れた実力を持つ宝生友于を後援した。江戸後期の江戸における勧進能は、五座筆頭の観世大夫以外では、宝生大夫の友于のみに興行が許可されており、この時期の宝生流がいかに隆盛だったかを物語っている。この弘化勧進能が江戸における最後の勧進能となった。（伊藤正義文庫蔵）

＊江戸筋違橋門外…現東京都千代田区外神田。江戸城外郭（そとぐるわ）の見付門の一つである筋違橋門の外の明地（あきち）。

＊斎藤月岑…文化 1 年～明治 11 年 （1804 ～ 78）。江戸後期から明治の文人。『江戸名所図会』を補正・刊行したことで著名。『弘化勧進能絵巻』は複数の模写本しか現存しないが、月岑による嘉永元 （1848）の識語がある。

Ⅰ－５. 天明二年四月難波新地勧進能興行番組　　横長帳（折紙綴）　1 冊　　天明２年 （1782）刊

天明２年４月６日より６日間、大坂の難波新地 （なんばしんち　現大阪市中央区難波１～４丁目・千日前１丁目）において催された勧進能興行の番組。主催の金春惣右衛門国惟は金春流太鼓方 14 世で、この時 39 歳であった。太鼓の金春惣右衛門家は、６世惣右衛門一峰 （寛永 21 年〔1634〕歿）の代に徳川幕府のお抱え役者となり、以後、代々金春座付をつとめた家系。難波新地は明和元年 （1764）に開発が始まった土地で、明和５年には確認できる最初の勧進能興行が催されている。難波新地には能常舞台が設置され、文政期（1818～29）頃まで大坂における主要な勧進能の興行地であり続けた。番組によると、初日から３日目のみ翁付で、以後は演じられず、《翁》を除き１日あたりの上演曲数は能が７番、狂言は初日から３日目までが５番、４日目から６日目までは６番であった。能の曲順は五番立を意識したものとなっており、４・５日目以外の最後の演目は祝言能となっている。主催の金春惣右衛門国惟は、初日の《高砂》《羽衣》《邯鄲》、２日目の《砧》、３日目の《道成寺》《三輪》、４日目の《誓願寺》《海人》、５日目の《望月》、６日目の《巻絹》《乱》の太鼓方に名前が記載される。初日の《翁》《高砂》《邯鄲》のシテを勤めた古春 （こはる）左衛門は、大坂在住の宝生流シテ方であり能名代 （のうなだい＊）であった。主催者の金春惣右衛門国惟に、主演役者としての出演を依頼されシテを勤めたものとみられる。古春左衛門は、弘化五年の宝生大夫勧進能興行においても、５日目２番目の能《加茂》でシテを勤めている。（伊藤正義文庫蔵）

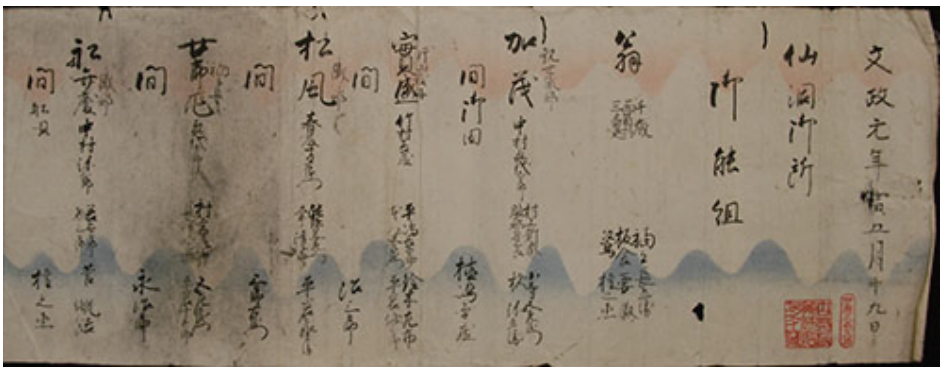
＊能名代…大坂の能界を統括するシテ方の役者が就く地位で、勧進能の主演を勤めるなどした。大坂の勧進能独自の職制か（天野文雄氏「「名代」と「能名代」―近世大坂の能の一面―」『演劇研究会会報』第 18 号参照）。

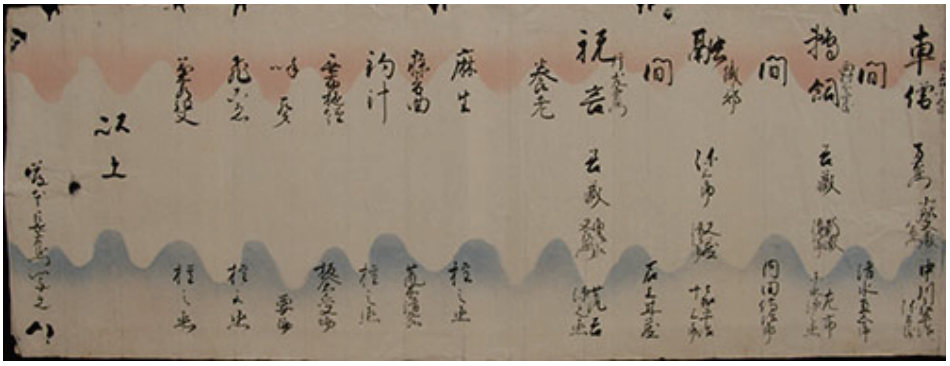
禁裏・仙洞能番組

神禁裏御所と仙洞御所では室町時代から猿楽が催され、江戸時代を通して、能・狂言のほか謡・舞囃子・仕舞などが頻繁に上演されました。禁裏・仙洞両御所は、近世の京都における主要な演能場所の１つであり、春秋二季の演能会など公式な催しのほかに、内々の催しも行われました。能会では翁付 10 番前後の能の上演が習わしとなっており、江戸幕府の翁付五番立の形態に比べ、かなり大がかりなものでした。また、原則として禁裏御所では、出勤役者を手猿楽 （てさるがく＊）か京都在住の禁裏御用の家系の役者に限り、専業の能役者の参勤を禁じていました。しかし、仙洞御所は、その規制はゆるやかだったようで、江戸時代には幕府お抱えの５座の大夫も出勤しています。ここでは、禁裏・仙洞御所のほか、桂御所（桂宮御殿）で催された能会の番組も紹介します。

＊手猿楽…素人の能役者。

Ⅰ－６. 文政元年五月十九日仙洞御所御能組　　一枚物　写　２枚

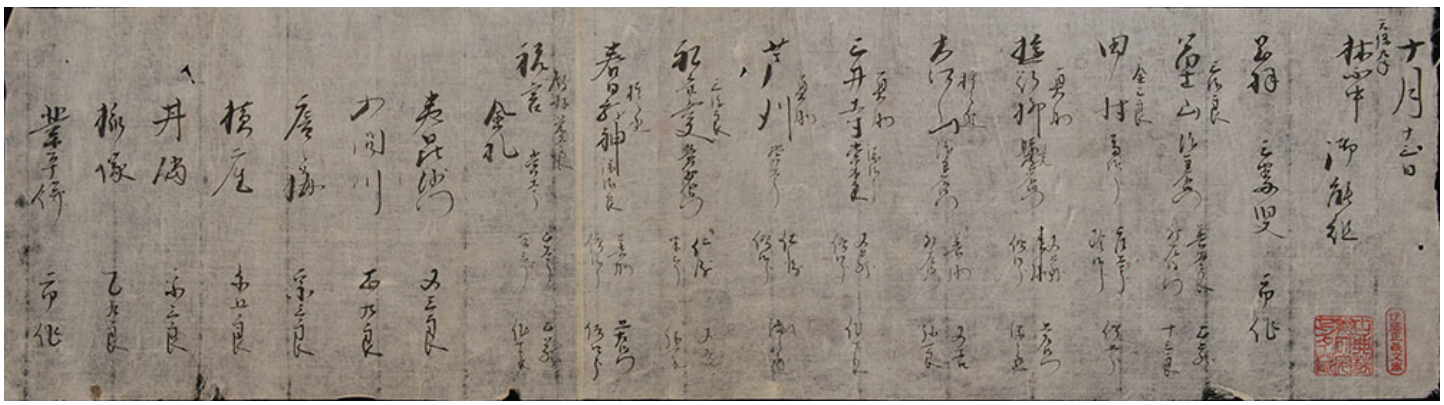




文政１年 （1818）５月 19 日に仙洞御所で催された能番組。もともと上演の決まっていた翁付能９番･狂言７番に加え、能《車僧》の後に乞能（こいのう＊）として、囃子（舞囃子か居囃子）１番･一調４番･半能１番が追加で上演された。能《加茂》をはじめ《松風》《船弁慶》《融》のシテを勤めたのは、観世大夫家の分家である３世観世鉄之丞清宣 （きよのり）。清宣は文化６年 （1809）に途絶えていた鉄之丞家の再興を幕府より許され、文化 12 年に名を鉄之丞から織部に改めた。それから間もない時期に、江戸から京都を訪問したことになる。薄紅色と浅葱色の打曇り模様の料紙を使用した、かなり華やかで珍しい体裁の番組に、乞能を記した別紙の番組が付く。(伊藤正義文庫蔵）

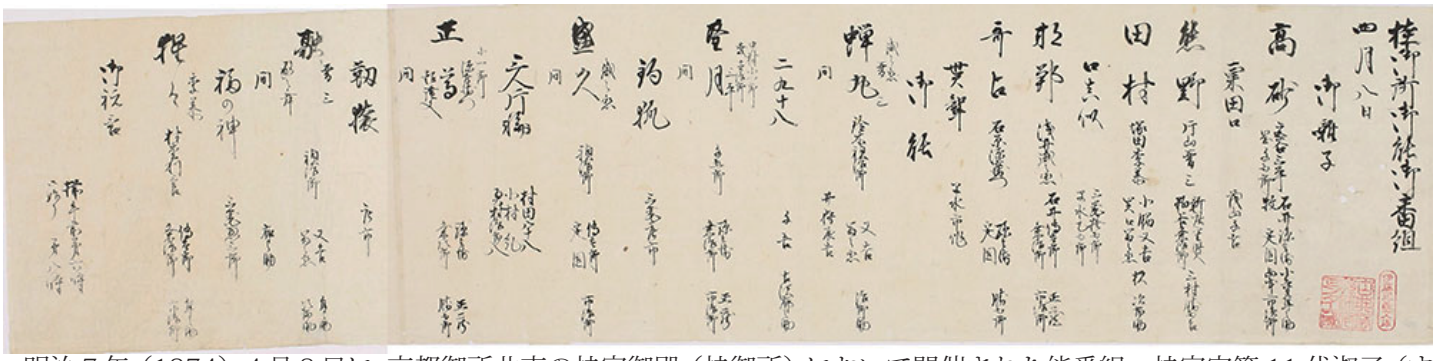
＊乞能…主客や主催者の希望によって、臨時に追加上演される能。

Ⅰ－７. 天保九年十月十三日禁中御能組　　一枚物　写



天保９年 （1838）10 月 13 日に禁裏御所において開催された能番組。禁裏能のならわし通り、翁付能９番 （最後の祝言能１番を含む）と狂言７番 （能の間に上演された）の番組構成となっている。能《翁》《富士山》《船弁慶》のシテを勤めた金剛流の野村三次郎は、江戸時代後期の京都を代表する能役者であり、生涯に《道成寺》を 60 回も演じ名人と評された。能《遊行柳》のシテを勤めた片山真助 （片山九郎右衛門家４世）とともに、江戸後期時代における京都の能役者評判記『能役者染物見立』（展示番号 18）の冒頭に名前が挙げられている。（伊藤正義文庫蔵）

Ⅰ－８.明治七年四月八日桂御所御能御番組　　一枚物　写

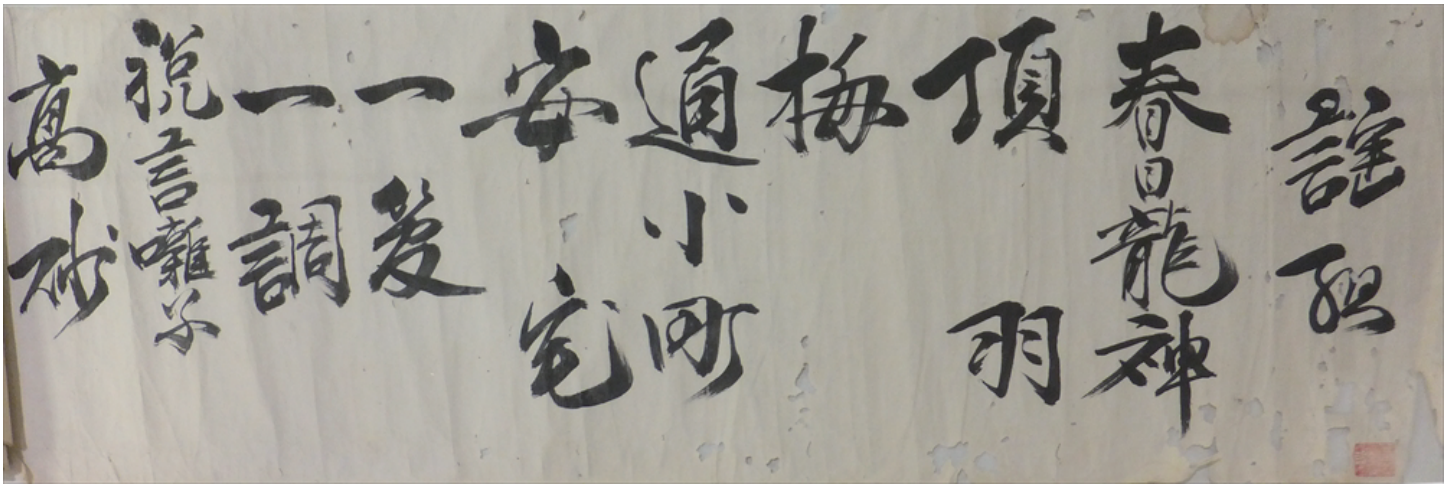


明治７年（1874）４月８日に、京都御所北東の桂宮御殿（桂御所）において開催された能番組。桂宮家第 11 代淑子（すみこ）内親王が、同年６月に東京に移住する妹の静寛院宮（せいかんいんのみや＊）の餞別として催した。『桂宮日記』によると、静寛院宮の外に、明治５年に閑院宮（かんいんのみや）第６代を継いだ易宮（＊）も同席した。午前６時に集合し、午前８時から午後３時まで舞囃子（もしくは居囃子）５番・能６番・狂言８番が上演された。囃子《熊野》・能《融》のシテを勤めた片山晋三（片山九郎右衛門家６世）と、囃子《邯鄲》・能《蝉丸》《盛久》のシテを勤めた浅井織之丞有直（浅井織之丞家５世）は、当時の京都で活動した観世流の主要な役者である。この能会の主催者である淑子内親王は、文久２年（1862）に桂宮家 11 代を相続し、明治維新後も京都に居住、明治 14 年に 53 歳で薨去した。ちなみに、現在の二条城本丸御殿内の御書院には座敷能舞台があるが、これは、明治 26･27 年に桂宮御殿から建物ごと移築されたものである。

＊静寛院宮…和宮の落飾後の名。　　（伊藤正義文庫）

＊易宮…後の載仁（ことひと）親王。

Ⅰ－９.謡会番組　　一枚物　写



謡会で上演される曲名と、「一管・一調」などの演奏形式のみが記された番組。大判の料紙に大書されていることから、謡会の開催場所に演目案内を目的に貼り出された番組とみられる。計８点の番組を貼り継ぎした番組集のうちの１点であり、その番組集に所収された大半の番組に、京観世五軒家の岩井七郎右衛門の高弟だった須田文蔵只晟の名が演者として記されている。須田文蔵只晟は宝暦・明和（1751～71）頃に活動した人物のため、展示番組も同時期に作成されたものと推測される。まず、《春日龍神》《項羽》《梅》《通小町》《安宅》の素謡５番が謡われ、その後に一管・一調（いずれも曲名と曲数は不明）が続き、最後に「祝言囃子」の《高砂》が演奏された。「祝言囃子」では、付祝言（つけしゅげん）の謡の代わりに、《高砂》の後半が居囃子として演奏されたのであろう。（須田家伝来等野口氏旧蔵資料）

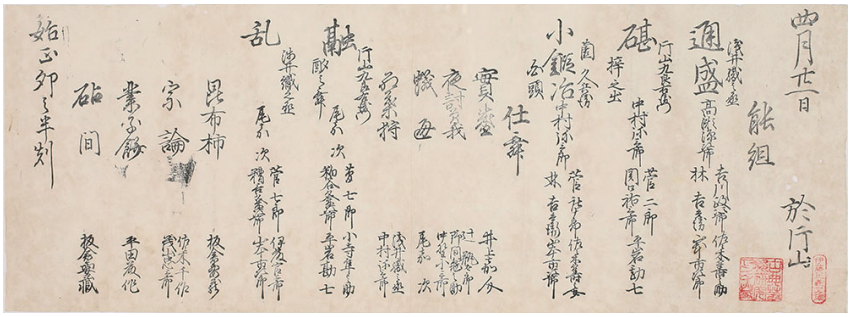
口上書き

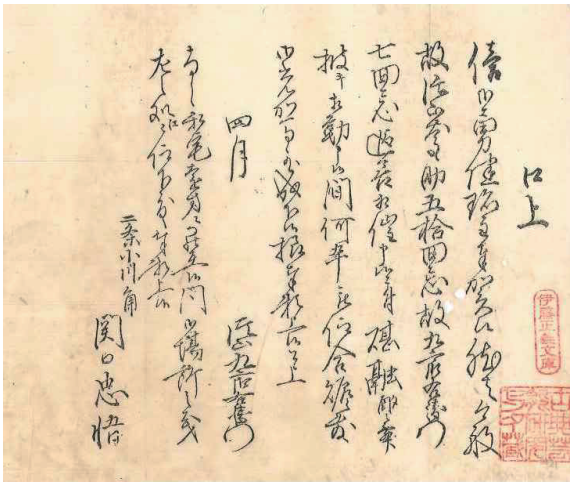
幕末・明治期の上方では、能興行が行われる場合、番組と切符を添えた口上書き（挨拶文）を、興行の主催者が見物客に事前に届ける習慣がありました。本来は口頭で伝えるべき挨拶の言葉を短い文章にして、興行前に常連客に届けていたのです。客は案内の内容を見て、実際に観劇するかどうかを決め、観劇する場合は、その代金を支払うシステムだったようです（＊）。口上書きは興行が終わると破棄されるのが普通だったらしく、現在まで残存している例は、余り知られていません。古典芸能研究センター伊藤正義文庫には、そうした貴重な口上書きが 25 点以上所蔵されており、今回は、そのうち２点を関連番組とともに紹介します。

＊宮本圭造氏「幕末維新期の京都能楽界―伊藤正義文庫蔵『幕末明治京都等能番　組集』の紹介と考察―」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第５号）参照。

Ⅰ－10. 明治三年四月二十一日故片山慶助五十回忌故片山九郎右衛門七回忌追善能組

一枚物　刊



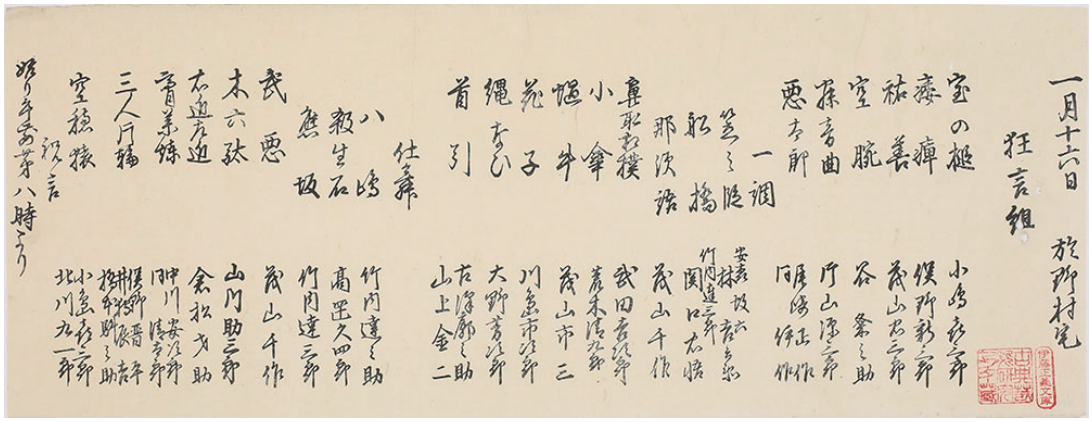


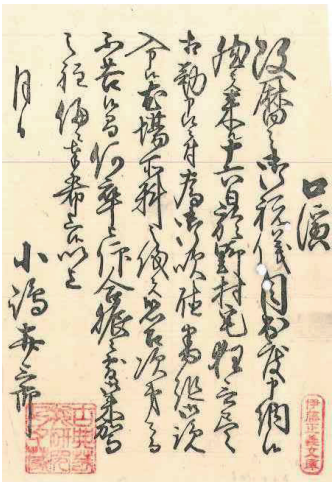
明治３年 （1870）４月 21 日に京都の片山舞台で行われた、片山九郎右衛門家３世慶助の 50 回忌と５世豊尚の七回忌追善供養能の番組。能５番・狂言３番・仕舞４番が、午前６時 （正卯之半刻）から上演された。番組には口上書きが添えられており、主催者の６世九郎右衛門豊光（後の晋三）が、能《砧》と能《融》の小書「酌之舞（しゃくのまい）」（＊）を披（ひら）くこと、京都在住の小鼓役者・関口忠悟が来場の申込み先であることが記されている。片山九郎右衛門家は、江戸時代中期から京都の観世流を統括する家柄であり、３世慶助は文政４年 （1821）、主催の豊光の父である５世豊尚は元治元年 （1864）に歿した。なお、片山舞台は元治元年の禁門の変で焼失したが、慶応２年 （1866）か、遅くとも明治２年（1869）には新しい舞台が建設されたことが指摘されている （＊）。（伊藤正義文庫）

＊「酌之舞」…後半のシテの舞に変化がつく。重い小書 （特殊演出）とされる。

＊宮本圭造氏「幕末維新期の京都能楽界―伊藤正義文庫蔵『幕末明治京都等能番　組集』の紹介と考察―」（『神戸女子大学古典芸能研究センター紀要』第５号）参照。

Ⅰ－11. 年不明一月十六日野村宅狂言組　　一枚物　刊





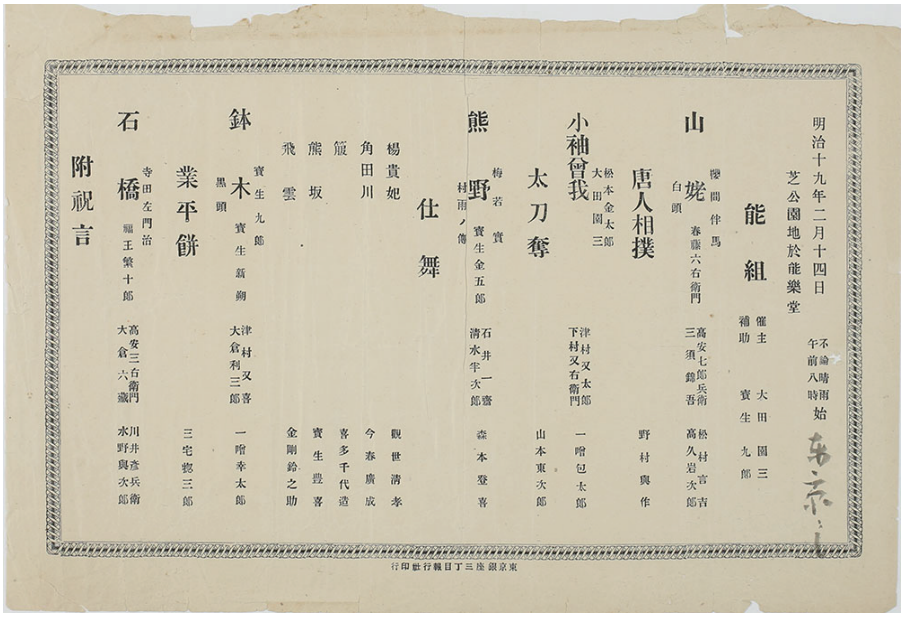
正月十六日に、京都の野村舞台 （＊）で行われた狂言尽しの番組。狂言 18 番・一調 3 番・仕舞 3 番が上演され、最後に付祝言が謡われた。この番組には、主催者の小嶋喜三郎による口上書きが添付されており、催しの宣伝のため事前に常連客に番組を届けること、場所料 （観劇料）の金額は客に任せることが記されている。口上書きの冒頭にある「改暦之御祝儀」とは、明治６年 （1873）の太陰暦 （旧暦）から太陽暦 （新暦）への改暦を指すとみられ、さすれば、この番組の開催年月は太陽暦が導入された明治６年１月ということになる。主催者の小嶋喜三郎は、幕末・明治期に活動した大蔵流狂言師で、番組最初の演目である狂言《宝の槌 （たからのつち）》と最後の演目である狂言《靭猿 （うつぼざる）》のシテを勤めている。（伊藤正義文庫蔵）

＊野村舞台…京都在住の金剛流シテ方野村三次郎宅の能舞台。

近代の能番組

明治維新後の文明開化により、明治２年 （1869）に西洋の活版印刷の技術が日本に導入されました。その影響は、それまで木版印刷で作られていた能の刷番組にも及び、じょじょに活版印刷による能番組が増えていきます。ここでは、日本初の能楽堂である芝能楽堂と、同じく日本初の博覧会となる京都博覧会において上演された能番組を、日本の近代化の足跡とともに紹介します。

Ⅰ－12. 明治十九年二月十四日芝能楽堂能組　　一枚物　刊（活版刷）

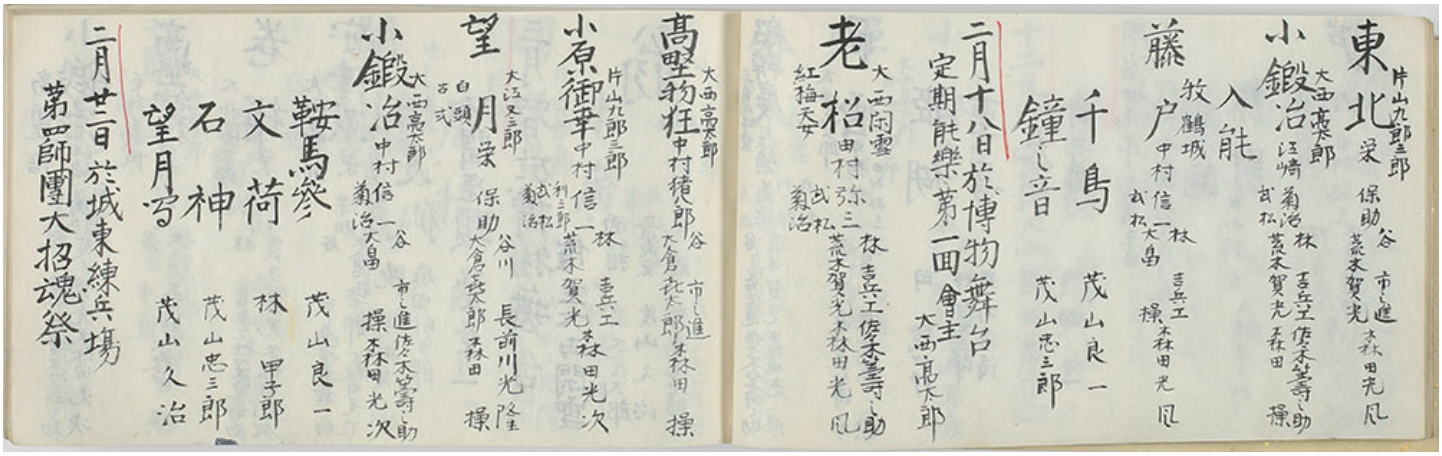


明治 19 年 （1886）2月 14 日に東京の芝能楽堂で開催された能会の番組。能５番・狂言３番・仕舞５番が上演され、最後に付祝言が謡われた。催主の補助として名前が載り、能《鉢木》のシテを勤めた宝生九郎知栄 （ともはる　宝生流 16 世）、最初の能《山姥》のシテを勤めた桜間伴馬 （ばんま　金春流）、４番目の能《熊野》のシテを勤めた初世梅若実 （観世流）は、「明治の三名人」と称された能楽師。会場の芝能楽堂は、明治 14 年 （1881）に芝公園内 （現東京都港区）に創建された日本初の能楽堂 （＊）であり、その建設には、明治維新の打撃で衰退した能楽を復興させるべく活動した、岩倉具視をはじめとする華族らの後援があった。番組には洋紙が用いられ、江戸時代には見られない近代的な枠模様で縁取られている。

（伊藤正義文庫蔵）

＊能楽堂…能舞台と見所（けんしょ　観客席）をともに屋内に取り込んだ近代的な能楽専用劇場。創建当初の芝能楽堂は、舞台と見所は別々の建物でその間は野天だったが、約 15 年後に行われた改築で、舞台と見所の間に屋根が設置され、舞台と見所が一体化した最初の能楽堂となった。ちなみに、芝能楽堂の能舞台は、現在、靖国神社内に移築されている。

Ⅰ－13. 能楽組　　横小本　１冊　江崎菊治写



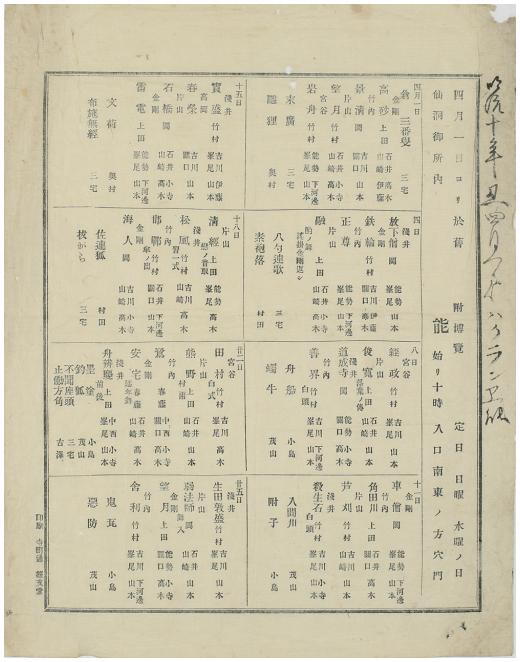
福王流ワキ方の９世江崎正左衛門直康 （本名、菊治）が書写した、明治 37 年 11 月から同 42 年７月までの能番組集。自身が、大阪・京都・兵庫において出演した 80 日分の催しを、年代順に並べて記録している。最も多く出演した会場は、明治８年（1875）に開設された大阪博物場能舞台（現大阪市中央区本町橋＊）。その他、京都の片山舞台・金剛舞台・東本願寺、兵庫の和田神社・射楯兵主神社・福昌寺 （八王寺）など、多くの開催地が記されている。明治時代後期における関西能楽界の動向を知る上で貴重な資料。（江崎家旧蔵資料）

＊大阪博物場能舞台…近代大阪の勧業・観光を目的に開設された博物群というべき複合施設で、博物館・美術館・図書館・商品陳列所が１箇所に併設され、能舞台も設置された。もと大坂西町奉行所の跡地で、慶応４年 （1868）より大阪府庁があったが、府庁の移設に伴い大阪博物館が建設された。

博覧会能

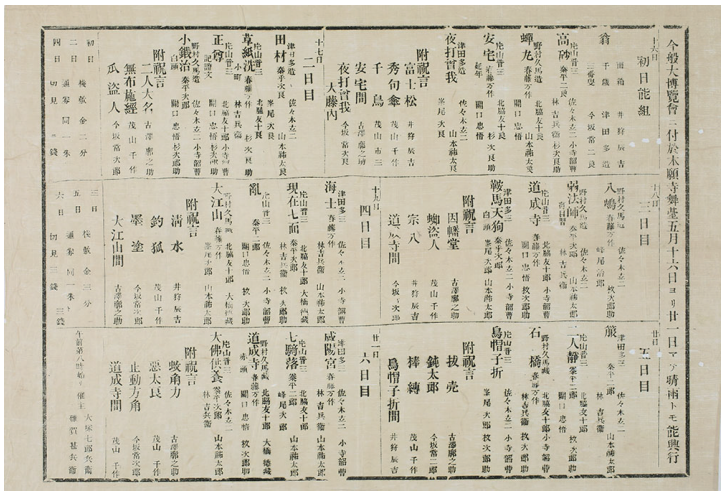
明治時代における近代化政策の一つとして、各地で博覧会が開催されました。京都も例外ではなく、明治政府が明治 10年（1877）に初めて開催した第１回内国勧業博覧会よりも早い同５年３月に第１回京都博覧会を開催しています。以後、明治 36 年 （1903）３月の第 33 回京都物産陳列大会まで 30 年以上に渡り、京都博覧会は毎年開催されました。京都博覧会において能楽は、第１回から第 16 回 （明治 20 年）までの京都博覧会のうち計 10 回上演されました。会場は、第１回京都博覧会では安井神社能舞台、それ以降は、西本願寺能舞台、仙洞御所や大宮御所内の仮設能舞台が使用されていました。博覧会の来場者への余興として催された興行ですが、明治維新の影響で苦境に喘いでいた京都の能楽界にとっては貴重な演能の機会だったと推測されます。

Ⅰ－14. 明治十年四月旧仙洞御所内博覧会能番組　　一枚物　刊（活版刷）



明治 10 年 （1877）３月開催の第６回京都博覧会に伴い上演された能興行番組。番組左枠外に「明治十年丑四月一日よりハクランヱ能」と墨書されている。旧仙洞御所内の仮設能舞台において、同年４月１日から 25 日まで計８回催された。上演日は日曜と水曜の週２日間で、開始時刻は午前 10 時であった。能４番と狂言２番を基本とし、初日のみ《翁》を上演している。開催日ごとに枠線で区切られた珍しい体裁となっており、演者はすべて名字のみ記載の簡略な内容。チラシに近い扱いで宣伝用に広く配布されたものであろう。（伊藤正義文庫蔵）

Ⅰ－15. 年不明五月大博覧会ニ付
本願寺舞台能興行番組　　一枚物　刊（活版刷）



明治期の京都博覧会に伴い上演された能興行番組。本願寺能舞台において、５月 16 日から 21 日まで計６回開催された。催主は大塚七郎兵衛・雑賀甚兵衛とある。能４番・狂言３番を基本とし、最後に付祝言が謡われた。初日のみ《翁》が演じられている。番組左端に観劇料が印刷されており、それによると、初日・２・４日目が「桟敷　金二分／通券　同一朱／切見 （＊） 二銭」、３・５・６日目が「桟敷　金三分／通券　同一朱ト三銭／切見　三銭」と、金額に違いがあった。片山晋三・野村久馬造ら当時の京都を代表するシテ方が毎回出演し、上演曲も《安宅》《夜打曽我》《道成寺》《烏帽子折》など、大人数が出演する派手な作品が選ばれている。京都博覧会において、能楽は第１回 （明治５年）から第 16 回 （明治 20 年）まで計 10 回上演されたが、演者に明治 11 年歿の小鼓役者・関口富之丞忠悟が含まれるため、それ以前の催しとみられる （＊）。(伊藤正義文庫蔵)

＊切見 （きりみ）…１日の演目を全て見ずに、１部分だけを見ること。

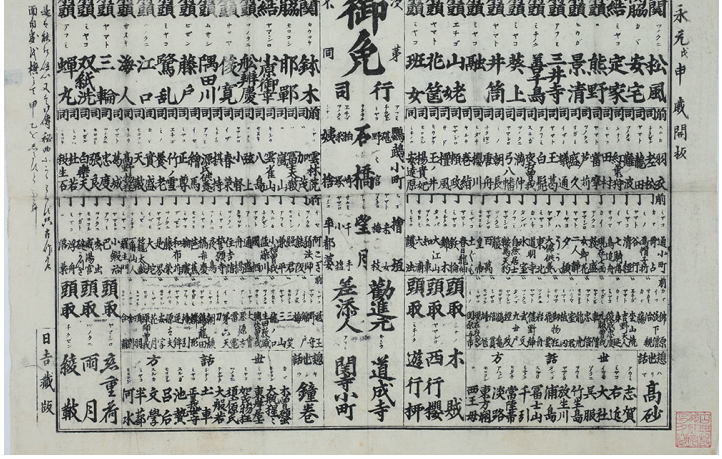
＊『鴻山文庫蔵能楽資料解題　下』（平成 26 年法政大学能楽研究所刊）所載の「京都本願寺舞台博覧会能番組」の解題参照。

見立番付

「見立番付」とは、力士の順位表である相撲番付の体裁にならい、さまざまな事物に序列をつけて並べた一覧表のことです。全国各地の物産・名所・温泉、江戸の料亭、学者、職人など、あらゆるものを順位付けした一枚刷りの読み物として、江戸時代から明治時代にかけて流行しました。見立番付は庶民にとって、遊び心満載の娯楽書であるとともに、貴重な知識が得られる情報誌でもありました。能楽の世界でも、わずかではありますが、見立番付や、それに準じるものが作られました。ここでは、幕末から明治時代に作られた古典芸能研究センター所蔵の資料を紹介します。

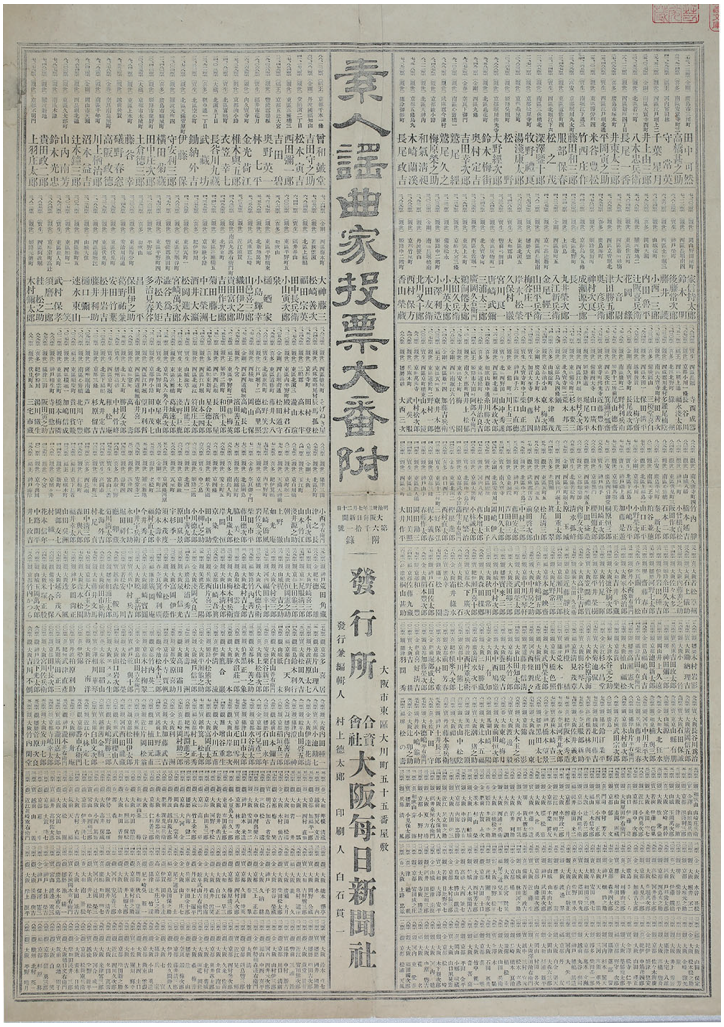
Ⅰ－16. 諸流能舞謡名所競

一枚物　嘉永１年（1848）刊（日吉蔵版）



能作品の格付けをした見立番付。相撲番付の体裁を真似て、三役（大関・関脇・小結）以下、東西に分けた 236 曲を上位から順に並べ、曲名の上部には作品の舞台となる土地をカタカナ表記の旧国名で記す。左枠外に「是は能の位い又は口伝秘曲にかゝわらず只今古作の／面白きを撰みて甲乙をしるすとなむ」とあり、曲の位の軽重、口伝の有無、秘曲かどうかに関わらず、曲の面白さで順位付けしたと記されるが、実際には習いのランクの高い曲が上位に選ばれる傾向にある。番付中央の枠内に記載された、勧進元の「道成寺」、差添人の「関寺小町」、行司の「石橋」以下 14 曲は、格付けの対象にならない別格扱いとなっている。また、東西の順位付けの別枠に記載された、頭取の「木賊」以下３曲（東）と「恋重荷」以下３曲（西）、総世話の「高砂」（東）と「鐘巻」（西）、世話方の「志賀」以下 13 曲（東）と「木曽願書」以下 13 曲（西）も現役の力士ではなく、序列の外に置かれている。（伊藤正義文庫蔵）

Ⅰ－17. 素人謡曲家投票大番付　　一枚物　刊（活版刷）　明治 33 年 (1900) 7 月大阪毎日新聞社発行

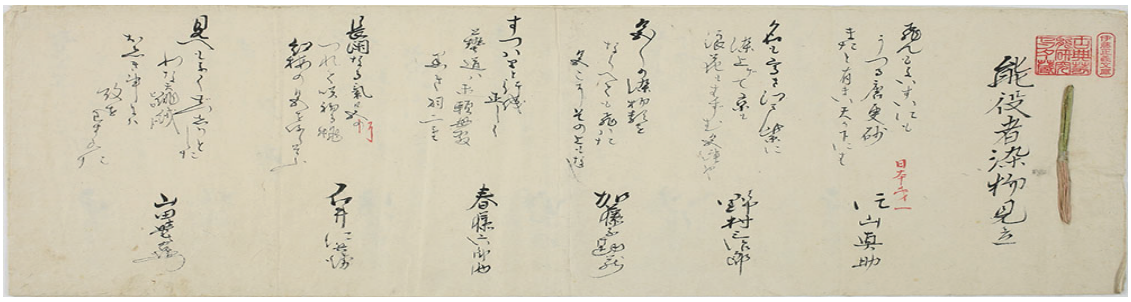


『大阪毎日新聞』明治 33 年（1900）7 月 20 日（6011 号）の付録として発行された「素人謡曲家」の投票番付。発行兼編輯人、村上徳太郎。ここでの「素人謡曲家」とは、シテもしくはワキの謡（うたい）を愛好する素人弟子を指す。全員がシテ・ワキいずれかの流派に属し、まれに狂言大蔵流の素人も混じる。京阪を中心に、北は富山、南は薩摩まで、広く西日本の謡の素人 836 名を東西に分け、一般投票を元に得票順に並べている。最上欄の上位者の中には、88,121 票を獲得した次点の幸流小鼓方・曽和鼓堂（そわこどう）が載る。鼓堂は京都の味噌・醤油製造と問屋を家業とする家の出身で、明治 32 年に 29 歳で幸流の師範となり、明治 39 年には謡で福王流の免許皆伝を受けている。また、同じく最上欄に載る「土倉徳三郎」（10,035 票）は、京都の大蔵流狂言方の茂山千五郎家の高弟である。明治時代後期における西日本の京阪を中心とした謡の盛況ぶりがうかがえる資料となっている。（伊藤正義文庫蔵）

Ⅰ－18. 能役者染物見立

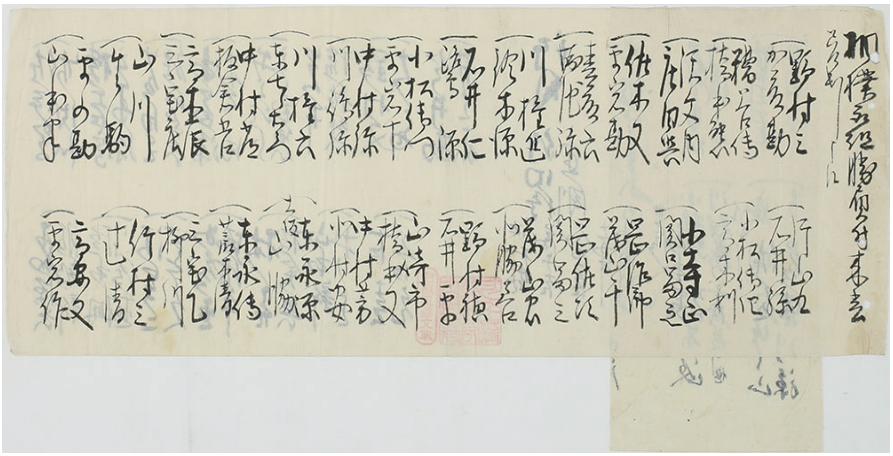
横長帳（折紙綴）　1 冊　　天保 10 年（1839）写

江戸時代後期の京都の能役者を、染め物に見立た和歌とともに批評したもの。最終丁裏に「読人しらず／天保十年／己亥五月／うつす」とある。評価の高い順から能役者が並べられており、1 番目に記された観世流シテ方の片山真助（片山九郎右衛門家 4 世）には、「日本第一」との朱書きも添えられている。2 番目の野村三次郎は、片山真助の 20 歳年少で、京都を代表する金剛流シテ方である。江戸後期の京都で活動した能役者の人気と技量がうかがえる貴重な資料。なお、1 世代後に作られた同種の資料に、幕末から明治の京阪の能役者を批評した『当世風流草花見立』（『能楽古今記』昭和 6 年春陽堂）が知られている。



（伊藤正義文庫蔵）

Ⅰ－19. 相撲取立勝負付　　一枚物（折紙）　1 枚　写



幕末頃の京阪の能役者を相撲の力士に見立てた対戦表。冒頭に「相撲取組勝負付来春／差出し申候」とある。折紙 1 枚の左端が糊付けされている。43 組 86 名の役者の取り組みが記され、さらに、「又飛すまふ御覧ニ入候」として、6 組 12 名の取り組みが折紙裏側の貼紙に記されている。冒頭の「野村三（次郎）／加藤勘（蔵）」の取組は、前者は金剛流、後者は金春流の同じシテ方の役者であるが、例えば、その下の「片山九（郎右衛門）／石井孫（兵衛）」は、前者は観世流シテ方、後者は石井流大鼓方の役者という具合に役籍が異なり、組み合わせの基準は今のところ未詳である。行司の 1 人に、加賀藩お抱えで京都在住の金春流シテ方の竹田権兵衛、世話人の 1 人に、京都の謡本書肆・山本長兵衛が選ばれている。（伊藤正義文庫蔵）

今様能狂言番組

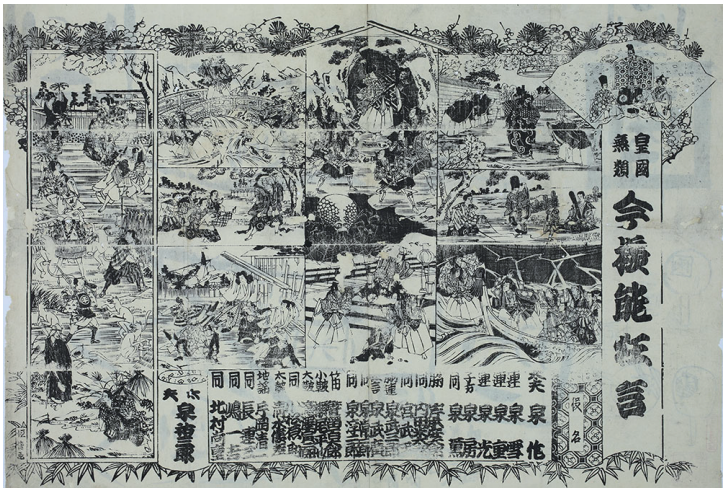
今様（いまよう）能狂言とは、江戸時代末期から大正時代中期にかけて行われた男女共演の能楽で、囃子に三味線音楽を用いる特殊な芸態が特徴です。役者は面を使用せず、素顔に化粧をして、舞踊を交えて演じました。林寿三郎が座頭だった前期は、「照葉（てりは）能狂言」「照葉能」などと呼ばれ、林（後に「泉」と改姓）祐三郎が座頭となった後期は、「今様能狂言」「今様能」などと呼ばれました。林寿三郎亡き後、祐三郎は金沢で活動しましたが、その後京都に拠点を移し、泉祐三郎一座として各地を巡業しました。一時は隆盛を誇りましたが、大正年間（1912～1926）には一座は解散し、今様能狂言は消滅してしまいます。古典芸能研究センターが所蔵している今様能狂言の番組・番付から、今回は、ユニークな辻番付を含めた4点を紹介します。

Ⅰ－20. 風流能狂言辻番付　　一枚物　刊

年不明8月1日より「東新橋松の谷座鋪」において興行された仙助能（せんすけのう）の辻番付。仙助能とは、江戸時代に寺社の境内や道ばたなどで興行していた辻能（つじのう）の一派で、江戸時代中期から明治時代後期まで、代々堀井仙助を座頭とする一座で能を続けた。今様能狂言の林寿三郎は、もとは堀井仙介一座に属したと伝わる。この番付の興行時期は明治頃か。歌舞伎の辻番付を真似た体裁となっている。（伊藤正義文庫蔵）

Ⅰ－21. 皇国無類今様能狂言辻番付

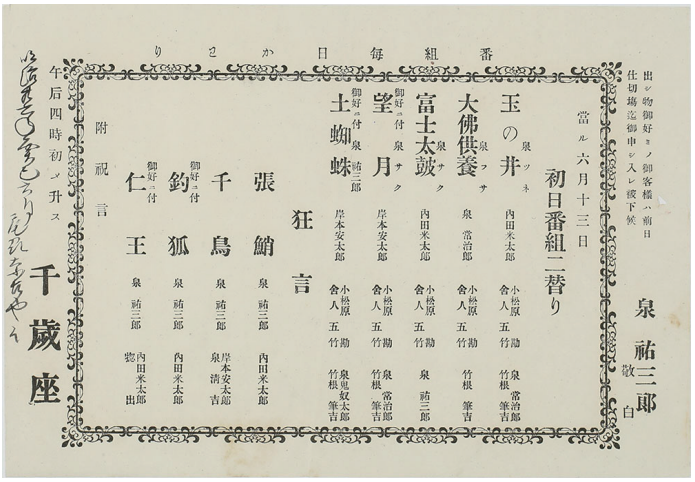
一枚物　刊



年月不明の泉祐三郎一座による今様能狂言興行の辻番付。歌舞伎の辻番付を真似た体裁となっている。泉祐三郎が「林」から「泉」に改姓した明治23年（1890）頃より後の興行とみられる。（伊藤正義文庫蔵）

Ⅰ－22. 明治26年6月13日 今様能狂言興行番組

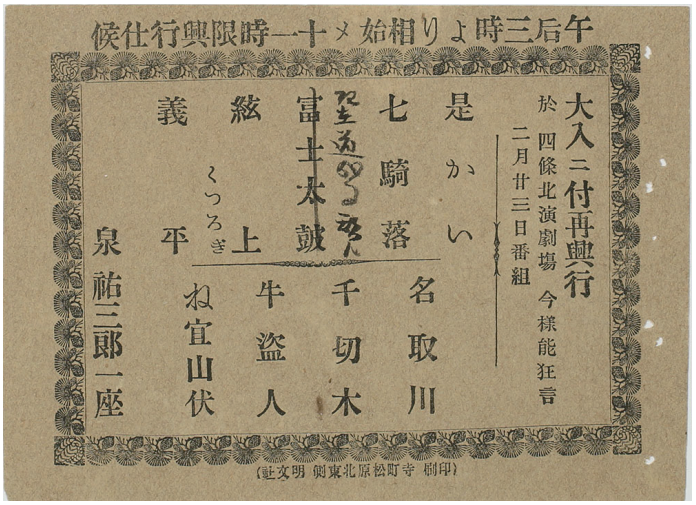
一枚物　刊（活版刷）



泉祐三郎の一座が、名古屋の千歳座で開催した今様能狂言の興行番組。番組末尾に「明治廿六年癸巳六月尾州なこやニて」の墨書がある。（伊藤正義文庫蔵）

Ⅰ－23. 年不明2月23日 今様能狂言興行番組

一枚物　刊（活版刷）



泉祐三郎の一座が、京都の四条北演劇場にて開催した今様能狂言の興行番組。3番目の能《富士太鼓》が《現在道成寺》に変更された。展示番号22と、興行時期は大きく変わらないとみられる。（伊藤正義文庫蔵）

Ⅱ　歌舞伎・人形浄瑠璃の番付

能や狂言の「番組」に対して、歌舞伎や人形浄瑠璃では、同じように宣伝のために作られたものを「番付(ばんづけ)」という。また、相撲の興行で配られる力士のランク表も「番付」という。歌舞伎・人形浄瑠璃の番付は、その時の興行の宣伝として演目名や配役を列記するという番組的な性格と、役者あるいは太夫や人形遣いや三味線弾きのランクを示すという性格を合わせ持ったものである。例えば役者の名前のみが載る顔見世番付では、主役を演じる役者の名前と端役を演じる役者の名前では、書かれる位置や字の大きさは全く異なる。配役表であっても文字の大小や書かれる位置でランクが示されている。

歌舞伎・人形浄瑠璃の番付には、上演年月日（＊上演年が記されていない番付も少なからずある）・上演する劇場・演目名（＝外題(げだい)）・配役（＝役人替名(やくにんかえな)）・粗筋などが記されている。能や狂言の番組が手書きのものと印刷されたものとがあるのに対して、歌舞伎や人形浄瑠璃の番付は、ほぼすべて印刷物である。ただし地方興行の番付は手書きのことが多い。

番付の形態は、1枚あるいは2枚の紙に印刷されたもの（＝一枚摺(いちまいずり)）と、数丁の紙を簡単に綴じた冊子体のものとがある。歌舞伎の番付の種類には、顔見世(かおみせ)番付・辻番付(つじばんづけ)・役割番付(やくわりばんづけ)・絵本番付・絵尽(えづくし)があり、その形式は、京・大坂・江戸で異なる。ただし、時代が下がるにつれて京と大坂の番付の形式は同化していき、さらに顔見世番付などは江戸の番付に近い形を取るようになっていく。浄瑠璃の番付は歌舞伎の番付と同型であり、その種類には辻番付・役割番付・絵尽がある。

歌舞伎や人形浄瑠璃など近世の芸能は、劇場で入場料を徴収して興行を行うので、興行を続けるためには観客動員が必須条件であった。そのためもあって宣伝のために様々なものが作られた。番付だけをとってもその種類は上記の通り多様である。

ここからの展示では、志水文庫(しすいぶんこ)所蔵の歌舞伎・人形浄瑠璃の番付類から様々な形態の物を選んで展示することで、その多様性を示していく。

（川端）

※各番付の解説は、講座日本の演劇4『近世の演劇』（勉誠社）の解説「役者評判記と番付･役者絵」(松平進)、「正本･絵本・床本・番付」(森谷裕美子)、赤間亮『図説江戸の演劇書』(八木書店)を参考にした。

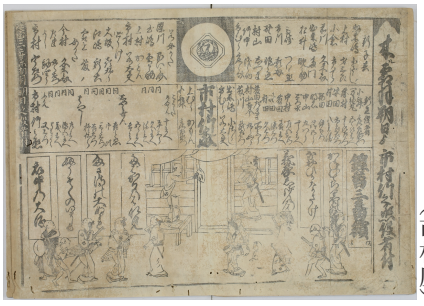
歌舞伎の顔見世番付

江戸時代、役者は一年間同じ座に出演するのが基本であった。十一月に各座で行われる顔見世は、一年間その座に出演する役者を披露するための興行であった。顔見世興行に際して、一座の顔ぶれを知らせるために印刷されたのが顔見世番付である。顔見世番付には外題を記さず、役者・作者・囃子方・振付師などの名前を一面に記す。京・大坂・江戸ともに顔見世番付は一枚摺であるが、その形式は三都で異なる。特に江戸の顔見世番付は、上下2段に分けて、上段に役者の名前、下段に役者の顔を描いている点が京・大坂の顔見世番付と大きく異なる。ただし江戸時代中期頃からは京・大坂の顔見世番付も江戸の顔見世番付に倣って役者の顔を描くものも出てくる。

（中村座）

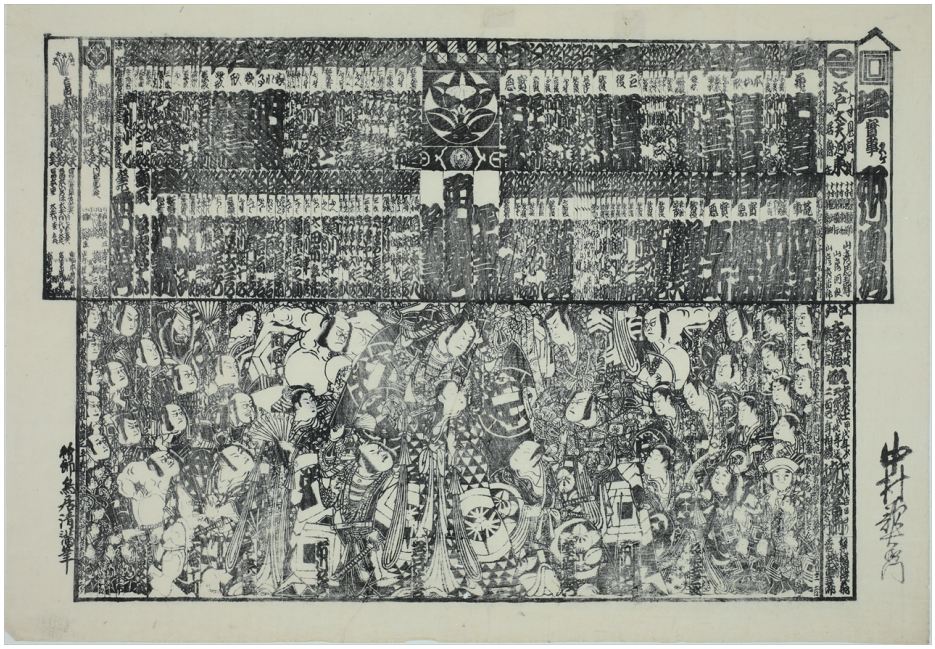
Ⅱ－1　観古襍帖から近世初期江戸顔見世番付

『観古襍帖』は貼交帖である。横綱谷風梶之助の手形から始まり、力士大空武左衛門の手形で終わる一帖で、中に市村座・中村座・森田座・山村座の四枚の顔見世番付が貼られている。市村座と森田座のものには「延宝三年霜月」と書かれている。いずれも現存最古の顔見世番付に見えるが、実はすべて覆刻版である。この延宝期の番付は複数の機関が所蔵する。それらはすべて覆刻版である。しかも同時期のものでありながら異版があり、大きくは二系統に分けることができる。『観古襍帖』所収の山村座の番付の横には、偸閑主人による識語があり、文政十年(1827)に覆刻版が作られたことが一応わかる。複雑な覆刻版の成立経緯や諸版の整理については、志水文庫の旧蔵者である信多純一先生の論考「師宣慕效―延宝三年江戸四座役者付考―」（『文学』49-2　1981年）に詳しい。


（市村座）

（森田座）

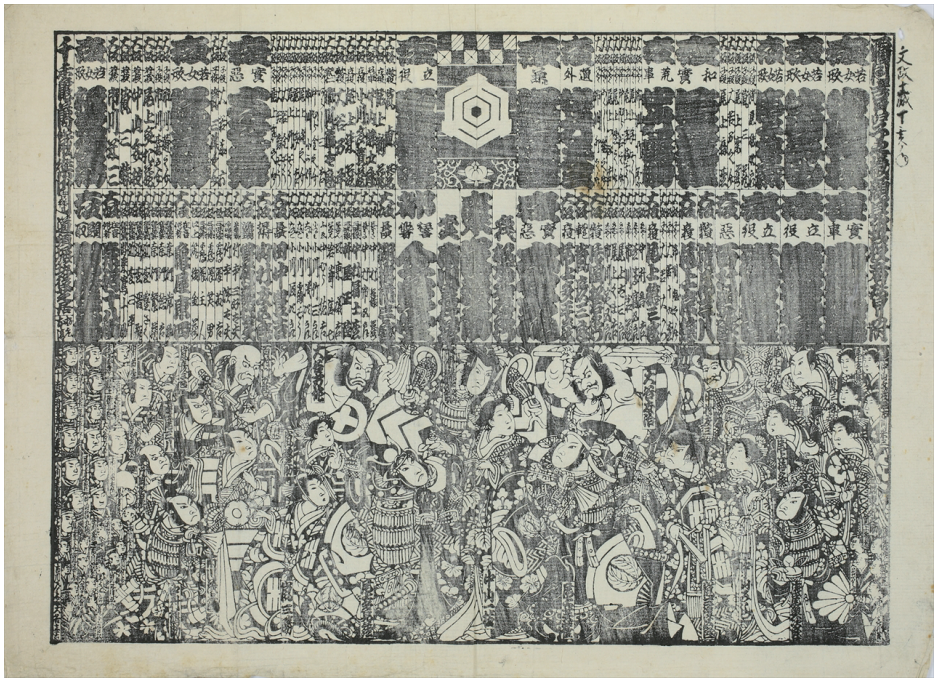
（山村座）



Ⅱ－2　江戸　顔見世番付

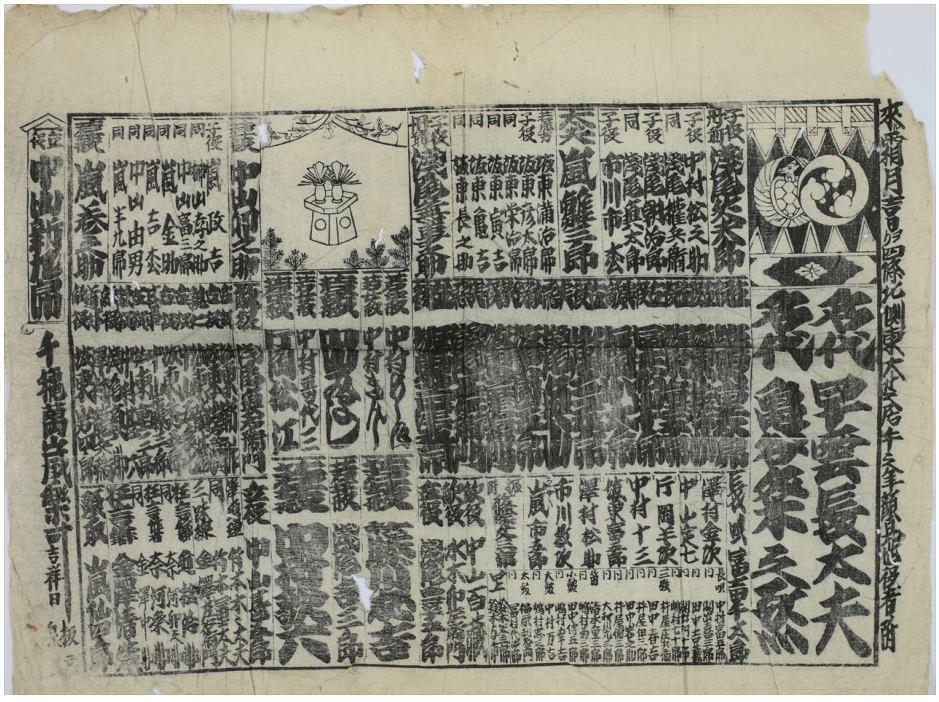
天保九年 (1838) 十一月市村座の顔見世番付。上下 2 段に分かれており、上段中央に市村座の定紋（丸に橘）、下に座本市村羽左衛門の名がある。左右には女方の坂東玉三郎・尾上栄三郎の名が並ぶ。上段はさらに 2 段に分かれており、上段右端に「兼ル中村歌右衛門」、下段右端に「荒事市川團十郎」の名がある。役者の名前が書かれる位置、文字の大きさが役者の格をあらわしている。下段には役者の姿が描かれ、名前が書かれた短冊が添えられている。描かれている役者の大きさや位置もまた役者の格をあらわし、中央の中村歌右衛門・岩井杜若・市川團十郎は、他の役者よりも大きく描かれている。

欄外左側に「絵師鳥居清満」とある。右側に手書きで「中村歌右衛門」とあるのは、四代目中村歌右衛門のサインである。



Ⅱ－3　大坂　顔見世番付

文政十年 (1827) 十一月筑後芝居の顔見世番付。江戸の番付風に変化した後の大坂の顔見世番付である。上下 2 段に分かれており、上段中央に橘の紋と大夫本嵐瑠之助、右に名代松本名左衛門、左に太夫市川喜代蔵。上段の役者の名前が書かれる位置や文字の大きさ、下段の役者の姿が描かれる位置や大きさが役者の格を表しているのも江戸の顔見世番付と同様である。



Ⅱ－4　京　顔見世番付

文政四年 (1821) 十一月四條北側東大芝居の顔見世番付。本来の京の顔見世番付の形式を取っている。右端に名代早雲長太夫・亀谷久米之丞とありその上にそれぞれの定紋が描かれる。名前が書かれる位置や文字の大きさで役者の格を示すのは、江戸・大坂と同様である。この時のこの座のトップは、立役は中山新九郎、女方は中村歌六、実悪は浅尾工左衛門であった。

Ⅱ－５　追善役者附

一見、江戸の顔見世番付のように見えるが、文字をよく読むと、下段右端には「文政年中ヨリ天保三年迄　追善役者附」とあり、上段右端の坂東三津五郎（三代目）の横には「天保二年卯年十二月廿七日　實誉秀隹信士」、瀬川菊之丞（五代目）の横には「天保三壬辰年正月七日　勇誉才阿哲藝信士」とそれぞれ没年・戒名が書かれている。中央の座名も「才の河原座」とある。つまりこれは、あの世にある「才の河原座」での顔見世番付、並んでいるのは天保二年から天保三年の間に亡くなった役者たちという顔見世番付のパロディである。

歌舞伎の辻番付

宣伝のために町々の辻に貼った番付ということで、辻番付と呼ぶ。大判で、外題名や劇場名が記されるが、なにより目立つように芝居の一場面を大きく描いている点が特徴的である。京・大坂の辻番付には基本的に配役表は記さないが、江戸の辻番付には記す。また、追善興行などの際には口上が記されることもある。

Ⅱ－６　江戸　辻番付 (中村座)

寛政三年 (1791) 五月中村座の大判横型辻番付。掲載されている演目は「艶容浪花姓 (はですがたなにわかたぎ)」と所作事「五月菊名大津絵 (さつきぎくなにしおおつえ)」で、それぞれの演目の絵が大きく描かれている。「艶容浪花姓」の上には「花霊曽我第三番目ニ取組奉入御覧ニ俄新きやうげんの名題」と角書がある。「五月菊名大津絵」は、大津絵の画題である藤娘・槍持ち若衆・鬼の念仏・座頭に扮した岩井半四郎・市川八百蔵・瀬川菊之丞が踊る変化舞踊である。両端が切れているが、他機関所蔵の同板番付には「寛政三辛亥年夏五月」と記されている。

Ⅱ－７　江戸　辻番付 (市村座)

延享三年 (1746) 五月市村座の大判縦型辻番付。演目は「一富清和年代記 (いちのとみせいわねんだいき)」二十五番続である。描かれているのは後列右に辰夜叉御前（市村亀蔵）、左に渡辺伯母（芳沢あやめ）、前列右に渡辺綱（坂東彦三郎）、左に安倍晴明（沢村宗十郎）が描かれている。絵の左には「来ル五月五日より新きやうげん仕候」とあるが、この年二月に江戸三座は火事で延焼、五月が再建後初の興行であった。「一富清和年代記」は台帳（＝台本）が残らないが、浦島太郎から七郎までの七世の物語と清和源氏の代々の物語が絡み合ったストーリーであったらしい。

Ⅱ－８　江戸　辻番付 (河原崎座)

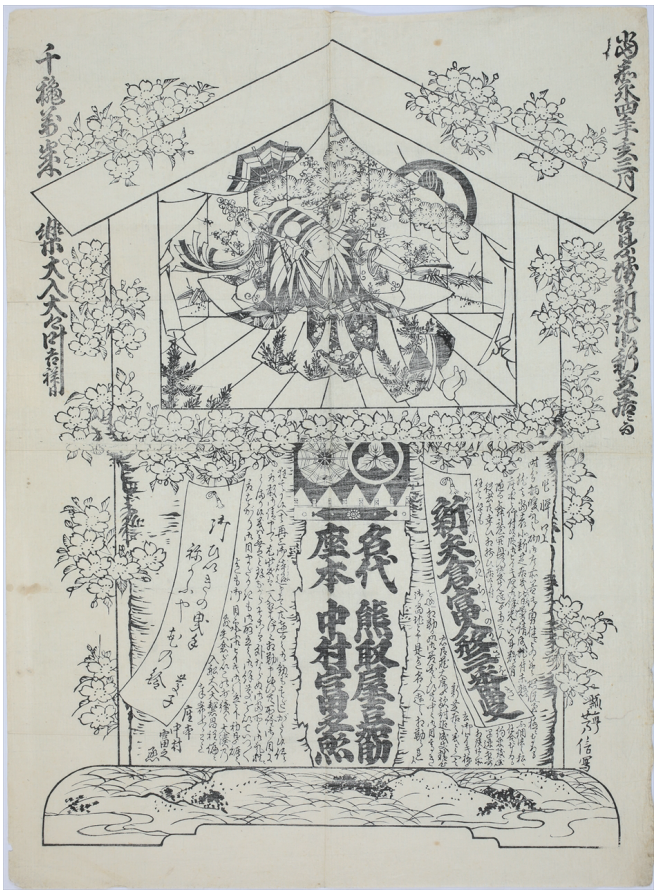
文政十一年 (1828) 四月河原崎座の大判横型辻番付。森田座の控櫓 (ひかえやぐら) である河原崎座の番付。演目は「ひらかな盛衰記」第二段目の切である。右側に座本河原崎権之助の口上が書かれている。その口上の文面によると、三月から上演している『義経千本桜』が好評である御礼に四月からは「ひらかな盛衰記」二段目切を途中に挟んで上演するということで、この辻番付はその宣伝である。描かれているのは母延寿(沢村源之助)、梶原源太景季（尾上菊五郎)、梶原平次景高（関三十郎)、千鳥（中村歌六)、浅尾歌四郎（軍内）である。

Ⅱ－９　大坂　辻番付 (中の芝居)

明和九年 (1772) 一月中の芝居の大判縦型辻番付。座本は市山助五郎、演目は「三千世界商往来 (さんぜんせかいやりくりおうらい)」、外題の角書に「山司金右衛門／相人久五郎」とある。大阪府立大学付属図書館の椿亭文庫に同演目の絵尽があり、表紙の絵の構図がこの辻番付とほぼ一致する。絵尽には「辰の年二のかはり新狂言」とある。上方の辻番付なので、配役は記されていない。「三千世界商往来」は、並木正三の作で、初代中村歌右衛門が甲比丹 (かひたん) ていかうと山司金右衛門の二役を勤め、それに相対する役である通詞久五郎を初代藤川八蔵が勤めている。描かれているのは甲比丹ていかう（中村歌右衛門)、傾城逢夜（中村喜代三郎)、通詞久五郎（藤川八蔵）である。

Ⅱ－10　京　顔見世番付・辻番付 (南大芝居)

文化十二年 (1815) 十一月南大芝居の大判縦型番付。名代は亀谷粂之丞、座本は都万太夫。真ん中左端に「来ル霜月吉日より子の年顔見世極リ役者附」とあり上三分の二ほどには役者と位付け・囃子方・狂言作者の名前が並ぶのでこの部分は顔見世番付である。下三分の一は中央に「那智山御利生敵討浦朝霧」と外題が書かれて大きく絵が描かれている点で辻番付の形式を持つ。つまりこの番付は、顔見世番付と辻番付の折衷である。下の絵は寺の山門と茶屋であろうか、上の顔見世番付部分の役者や作者の名前は、寺社の奉納額に書かれるという趣向になっている。描かれているのは、小割伝内（二代目嵐吉三郎)、杢之進娘おきよ（叶珉子)、笹屋半兵衛（浅尾工左衛門）である。

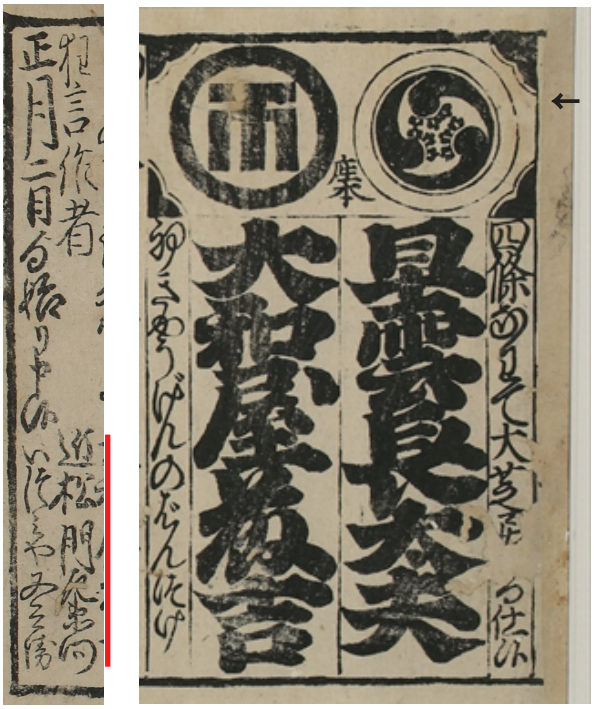


Ⅱ－11　堺　辻番付

嘉永四年 (1851) 三月堺新地北新芝居の大判縦型辻番付。名代は熊取屋嘉助、座本は中村富之丞、演目は「新矢倉富人形三番叟 (ぶたいびらきちよのわざおぎ)」。座本の口上には「忠臣蔵大序より敵討迄」とあり、三番叟の後には「仮名手本忠臣蔵」が上演されたことがわかる。これは他機関所蔵の役割番付でも確認できる。この時期、天保の改革で摂津・河内・和泉三カ国追放となった二代目中村富十郎が堺に移り住み (堺は和泉国ではあるが堺奉行の支配地であるため追放範囲から除外された)、新地北新芝居の舞台に出演していた。嘉永四年三月の「新矢倉富人形三番叟」では三番叟を演じ、「仮名手本忠臣蔵」ではお軽・蘭の方など複数の役を演じている。描かれているのは富十郎演じる三番叟である。

歌舞伎の役割番付

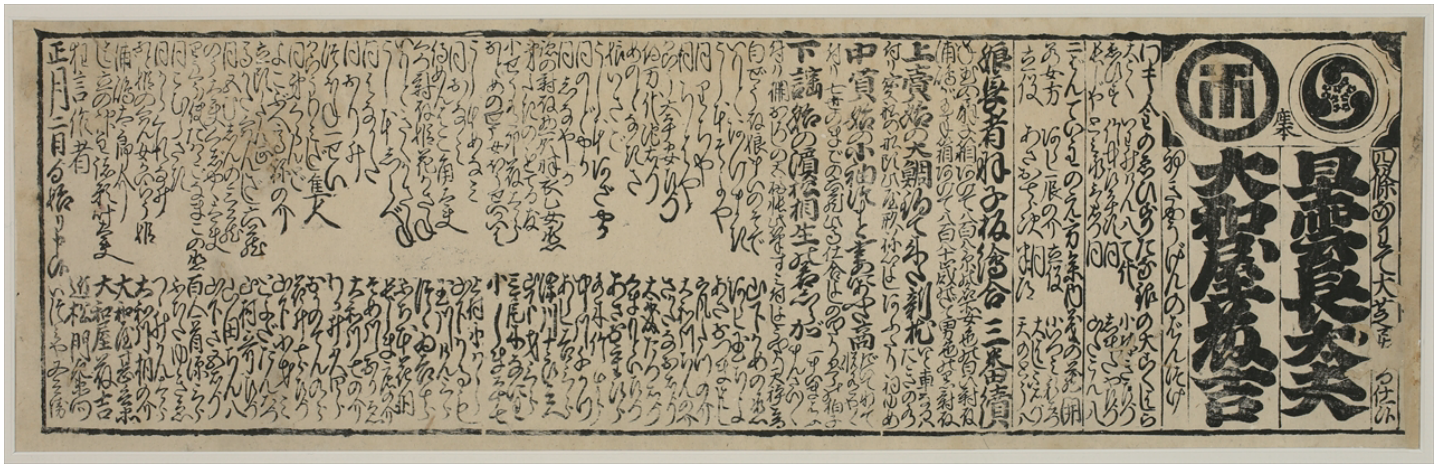
上演する芝居の演目名とその配役を知らせることを目的として作られた番付である。番付類の中でも、京・大坂・江戸でもっとも形式が異なる。当初、京の番付は横長版の 2 枚組であった。1 枚目には座本と外題が記され、2 枚目には配役が記される。版型は後に大坂の番付と同じ半紙版になる。大坂の番付は半紙版 2 枚組であった。1 枚目と 2 枚目に記される内容は京の番付と同様である。その後江戸中期頃には、京・大坂とも 1 枚に外題と配役を記す形へと変化する。江戸の役割番付は一枚摺ではなく 3 丁ほどの冊子体である。1 丁表裏に座の定紋と役者の定紋が記されているため、紋番付とも呼ぶ。2 丁目表から終丁表にかけて外題や配役が記され、終丁裏には作者連名・初日の年月日・座本名が記されるのが定型である。



← この前に外題が書かれた箸

Ⅱ－12　京　役割番付 (四条縄手大芝居)

元禄十七年 (1704) 正月四條縄手大芝居の横長型役割番付。京都独自の版型である。座本は早雲長太夫と大和屋藤吉、演目は「娘長者羽子板絵合 (むすめちようじやはごいたえあわせ)」。右端に書かれている外題部分が切断されている（Ⅱ－13 展示参照)。元禄期の番付がほとんど残っていない中で、元禄十五年正月上演の「けいせい壬生大念仏」の役割番付（早稲田大学演劇博物館蔵）と並んで貴重な資料である。この外題は役者評判記『役者舞扇子』の記事から外題名は知られていたが、絵入狂言本等が現存しないため、その内容は不明であった。この番付の出現により役名が明らかになり、何よりも番付の末尾の「作者　近松門左衛門」から、近松作の歌舞伎であることが判明した。この時期の近松の新たな動向を示す資料である。



Ⅱ－13　京　役割番付 断簡 (北側西角大芝居)

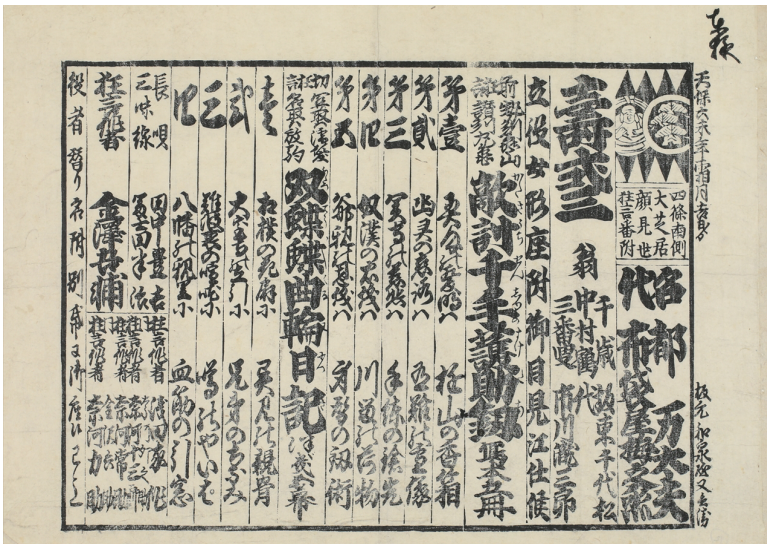
上演年不明四條通北側西角大芝居の横長型役割番付の一部分。京都独自の版型である。丁度Ⅱ－12の切断されている部分が、この番付では残っている。名代は蛭子屋吉郎兵衛、座本は岩井半四郎、演目は「大塔公曦鎧 (おおとうのきみあさひのよろい)」である。岩井半四郎は享保七年から十四年まで京都に出勤している。その内岩井半四郎が京都で座本を勤めたのは、享保九年であるが、その時の名代は蛭子屋吉郎兵衛ではなく大黒屋竹之丞であり、この番付がいつのものであるかは確定できない。

Ⅱ－14　京　役割番付 断簡

寛延二年 (1749) 九月の横長型役割番付の一部分。ただし、寛延二年九月二日に江戸で亡くなった初代瀬川菊之丞の追善のために急遽差し挟まれた演目の案内らしく、これは宣伝のための辻番付かもしれない。名代は布袋屋梅之丞、座本は嵐三右衛門。番付の前半部分は切断して不明であるが「てふよ胡蝶よ四季折々も夢の戯　移り香残る獅子王の俤」とあるカタリから、追善として菊之丞が得意とした所作事「石橋 (しやつきよう)」が上演されたのかも知れない。役人替名は「夕霞浅間嶽 (ゆうがすみあさまがだけ)」のもので、中村富十郎 (初代) が傾城奥州を演じている。「夕霞浅間嶽」は、享保十九年 (1734) 江戸の中村座で沢村宗十郎と瀬川菊之丞が上演して大当たりをとった所作事であったため、追善の演目として取り上げられたと考えられる。

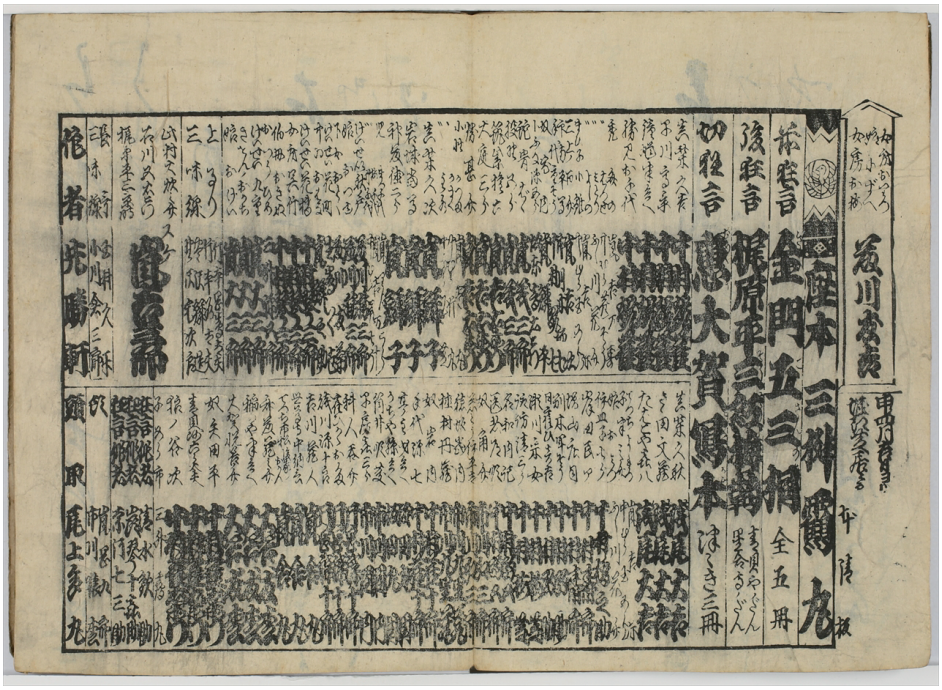
Ⅱ－15　京　役割番付 (南側大芝居)

天保六年 (1835) 十一月四条南側大芝居の役割番付。2 枚組の 1 枚目。名代は都万太夫と布袋屋梅之丞、演目は「寿式三」「敵討千手護助剱 (かたきうちせんじゆのすけだち)」と「双蝶蝶曲輪日記 (ふたつちようちようくるわのにつき)」。1 枚目には名代・外題・狂言作者・長唄と三味線が書かれている。古典芸能研究センターでは 2 枚目の番付を所蔵していないが、役人替名が書かれた 2 枚目と対になっているはずである。十一月の顔見世興行なので、最初に「寿式三」が上演されている。



Ⅱ－16　大坂　役割番付 (角の芝居)

享保十六年 (1731) 月日不明 (推定) 角の芝居の役割番付。座本は佐渡島長五郎、ここには記されていないが名代は大坂太左衛門、演目は「わかさの国めおとのかたき討」である。右端に「わかさの国めおとのかたき討　佐渡島長五郎座」とあり、八つのコマに役者の姿と役者名と僅かながら説明が記されている“はんこ絵番付”。記述の形式は絵尽に似ている。阪急学園池田文庫に同板のものが残る。年の推定は土田衛氏「『歌舞伎年表』補訂考証享保編其四」(『演劇研究会会報』第 33 号) による。



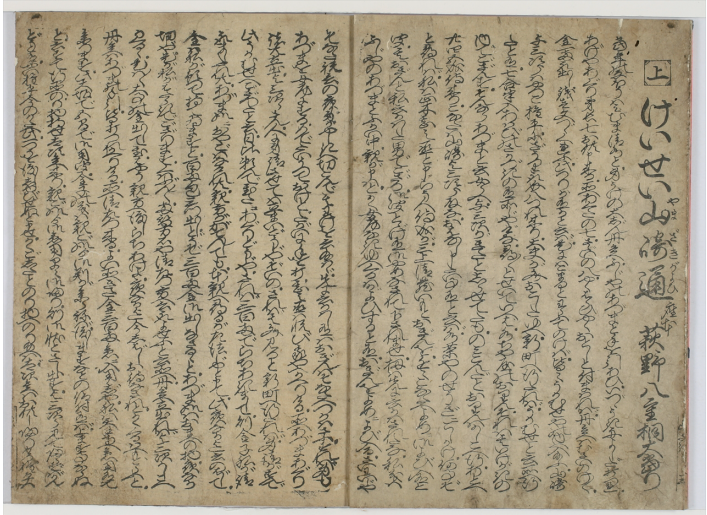
Ⅱ－17　大坂　役割番付
（堀江芝居）

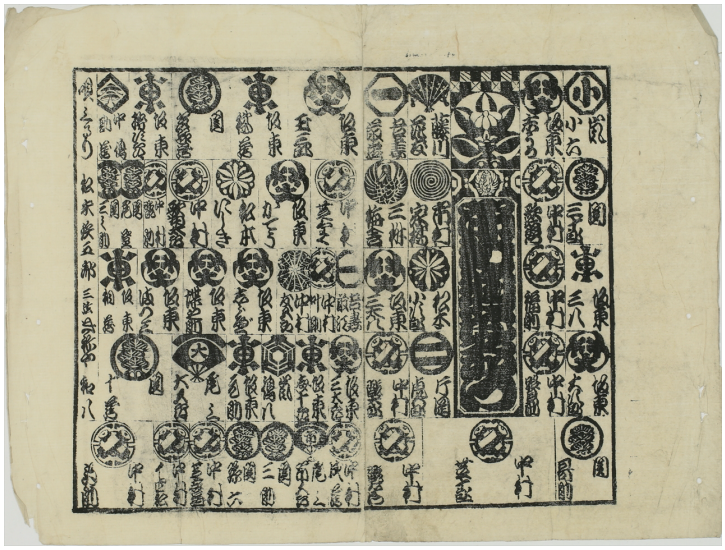
番付の貼り込み帖に貼られた一葉。万延元年 (1860) 四月堀江芝居の役割番付。座本は三桝鶴丸、演目は「金門五三桐 (きんもんごさんのきり)」「梶原平三紅梅靹 (かじわらへいぞうこうばいたづな)」「恵大賀寫本 (おめぐみおおがのうつしがき)」。「梶原平三紅梅靹」の浮世絵 (梶原平三：嵐吉三郎、青貝屋六郎太夫：中村雀右衛門。娘小すえ：藤川友吉) が早稲田大學演劇博物館ほかに現存している。

Ⅱ－18（参考）
絵入狂言本　『けいせい山崎通』

絵入狂言本は、歌舞伎の粗筋を挿絵と共に記した本であり、元禄から元文頃まで京・大坂・江戸で刊行された。多くの絵入狂言本では、表紙見返しあるいは初丁に「役人替名」が載る。番付が基本的には上演前に制作されるのに対して、絵入狂言本はおそらく上演後すぐに刊行されたと考えられ、僅かではあるがそこには時差がある。その結果、番付の役人替名と絵入狂言本の役人替名にはいくらかの齟齬が見られる場合がある。

『けいせい山崎通』は享保八年正月京都の荻野八重桐座で上演された歌舞伎である。京都で上演する直前に大坂でも上演されていたことが役者評判記の記述から分かるが、この絵入狂言本には、京都で上演した際の役人替名の下に大坂で上演した際の役人替名も記されている。絵入狂言本の翻刻は『徳川文藝類楽七』にあったが、ながらく原本は不明であった。

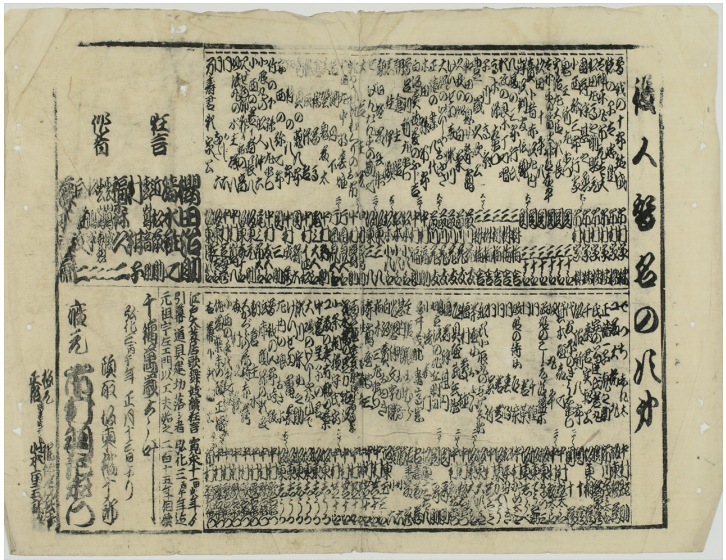




Ⅱ－19　江戸　役割番付 (市村座)

Ⅱ－20　江戸　絵本番付 (市村座)

嘉永七年 (1854) 三月河原崎座の役割番付の表紙と同一興行の絵本番付。演目は「都鳥廓白浪 (みやこどりながれのしらなみ)」「初霞女猿廻 (はつかすみおんなさるひき)」「寄三升花四季画 (よせてみますはなのにしきえ)」。役割番付は紋番付の部分が表紙になる。絵本番付の中は、枠外に場立が書かれ、各場が絵で綴られている。絵の間に書かれている文字は役名、役者名、「おおでき」「大評判」等の評である。



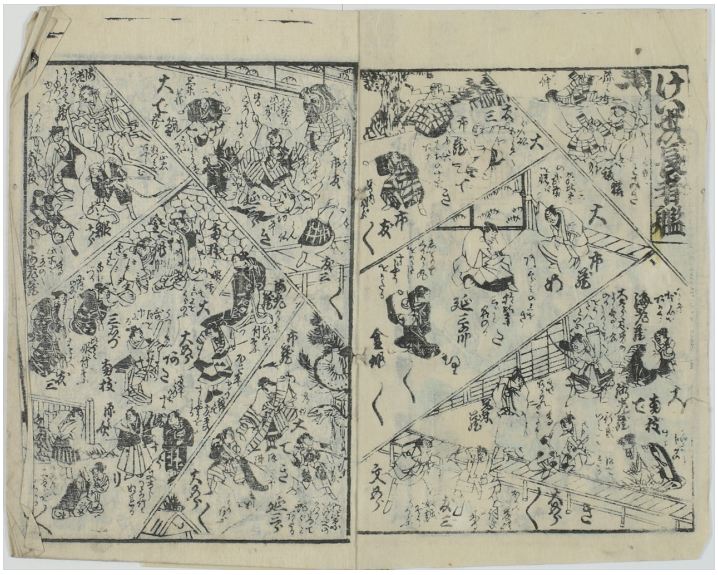
Ⅱ－21　江戸　役割番付 (市村座)

Ⅱ－22　江戸　絵本番付 (市村座)

弘化三年 (1846) 正月市村座の役割番付を綴じを開いた状態で展示する。演目は「当曽我武絵懸額 (まむきそがむしやえのかけがく)」「神楽諷雲井曲毬 (かぐらうたくもいのきよくまい)」である。江戸の役割番付は、1 丁目が紋番付、2 丁目に大名題・カタリ・浄瑠璃・場立、3 丁目に役人替名・狂言作者・上演年月・座本・板元が書かれている。隣は同興行の絵本番付の表紙。外題と座名が書かれている。

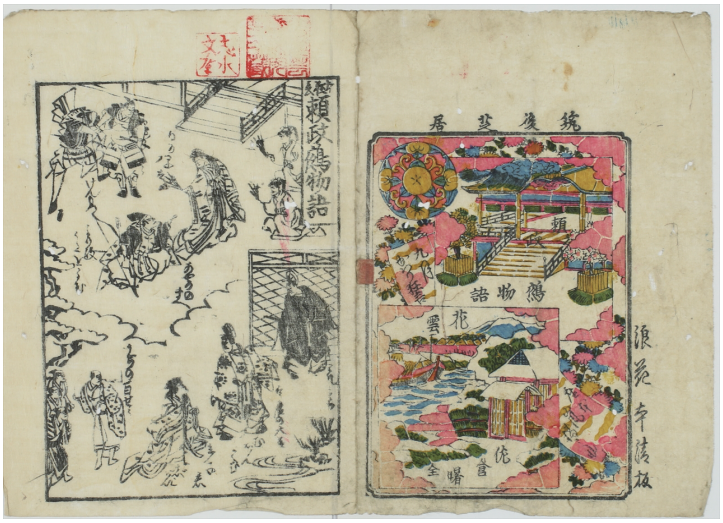
Ⅱ－23　名古屋　役割番付 (大須)

天保十五年 (1844) 五月の役割番付。京・大坂・江戸以外の地での興行に際して摺られた番付はよく似た形式になっている。演目は「伊達姿萩燕都褄 (みなろうてはぎのえどづま)」。上演年は日本大学の「歌舞伎番付デジタルアーカイブ」による。同じ外題の歌舞伎が複数回上演されているが、この大須での上演以外は、外題の読みが「だてすがたはぎのえどづま」である。



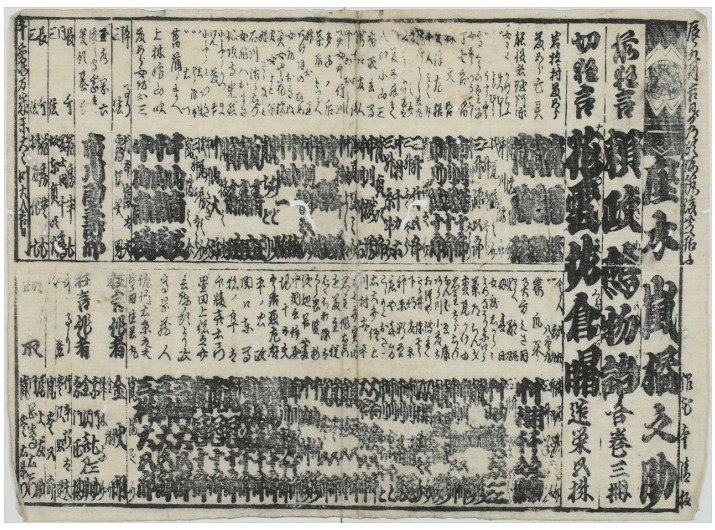
Ⅱ－25　大坂　絵尽 (筑後芝居)

安政三年 (1856) 九月筑後芝居の絵尽を綴じを開いた状態で展示する。座元は嵐橘之助、演目は「頼政鵺物語 (よりまさぬえものがたり)」「花雲佐倉曙 (はなのくもさくらのあけぼの)」である。上方の絵尽の表紙は合羽刷りのカラー版で、表紙の裏丁から本文が始まっている。こうした形の本は共表紙という。この絵尽の文字部分には役名は書かれているが、役者名は書かれていない。「頼政鵺物語」「花雲佐倉曙」共に度々上演されている演目であり、過去に作られた絵尽の版木を再利用して、役者名だけを削っているのである。末丁は役割番付になっている。



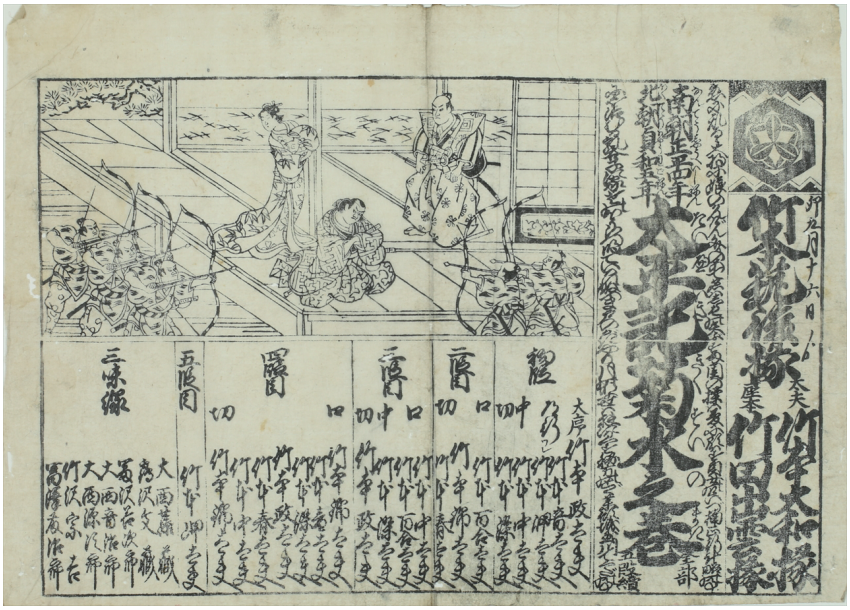
Ⅱ－24　大坂　絵尽 (中の芝居)

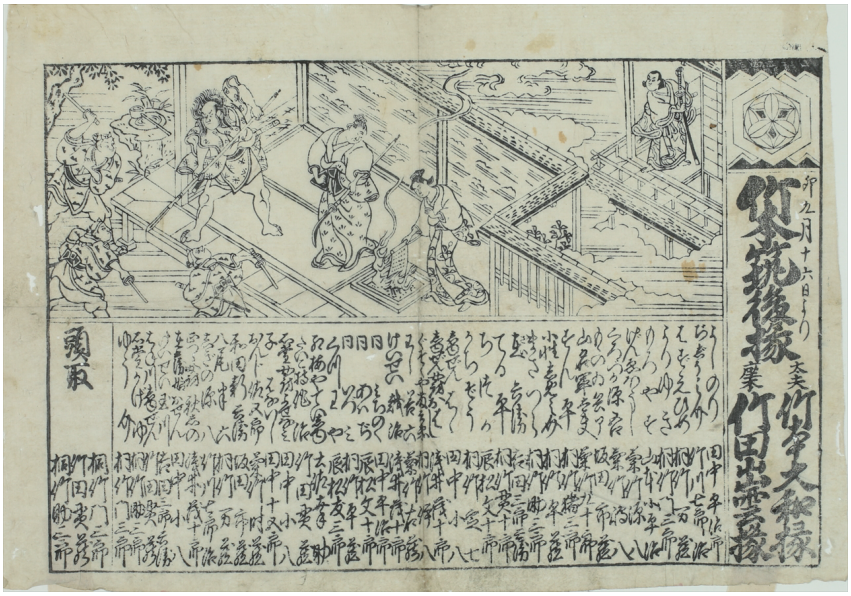
安政四年 (1857) 正月中之芝居の役割番付。座本は市川てる世、演目は「けいせい長者鑑 (ちようじやかがみ)」「寿勧進帳 (ことぶきかんじんちよう)」「梶原平三紅梅靹 (かじわらへいぞうこうばいたづな)」である。絵の間に書かれている文字は、役者名、「大あたり」「大でき」などの評、簡単な状況説明である。Ⅱ－25 の絵尽では、役者名が削られている。



Ⅱ－26　大坂　役割番付（竹本座）

宝暦九年 (1759) 九月十六日大坂竹本座の人形浄瑠璃役割番付。近松半二ほか作の浄瑠璃「太平記菊水之巻 (たいへいききくすいのまき)」の初演番付。2 枚組で、1 枚目には太夫（竹本大和掾）、座本（竹田出雲）、外題とカタリ、太夫・三味線役割が書かれ、三段目切の場の絵が描かれている。2 枚目には人形遣いの役割が書かれ、四段目切の場の絵が描かれている。





浄瑠璃の番付

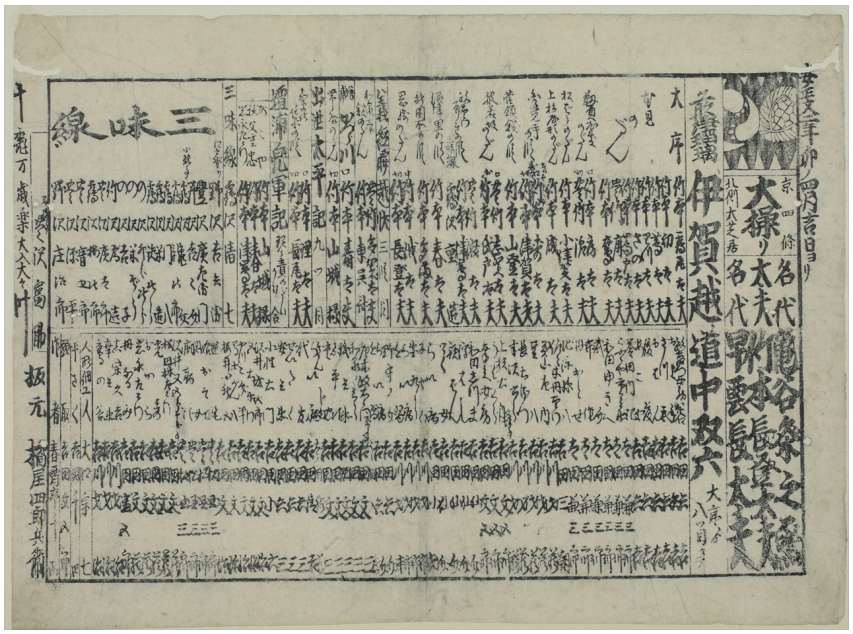
歌舞伎同様に、宣伝のために町々の辻に貼った辻番付がいくつか残っているが、現存する浄瑠璃の番付はほとんどが役割番付である。正徳五年 (1715) 上演の『国性爺合戦』が『義太夫年表近世篇』に載っているが、虎を掴む国性爺などの絵が描かれ下に人形遣いの配役（＝人形役割）が記されている。初期の番付は絵と人形役割が中心であったらしい。定型化した浄瑠璃の役割番付には、絵なしで太夫役割と人形役割を記した 1 枚組のものと、絵が描かれて 1 枚目に太夫役割 2 枚目に人形役割を記した 2 枚組のものとがある。2 枚組の役割番付は、だいたい享保頃から明和頃までに作られたようである。

その他、浄瑠璃の番付には、絵番付や見立番付がある。絵番付は、一面絵が描かれており、端に外題と座本が記されている。絵の形式は、複数の場面が異時同図法式に描かれていたり、コマ絵になっていたり、あるいは登場人物を並べたりと様々であり、絵尽との関連が想定される。『義太夫年表近世篇』補遺編には、一番古い例として享保七年九月一日初日の『仏御前扇軍』の絵番付が載る。

見立番付は、相撲の番付や歌舞伎の番付に倣って、様々な事象のランク付けを行ったものであり、浄瑠璃に限定されるものではない。しかし、浄瑠璃に関しては、一時的な摺り物ではなく、「三都太夫三味線人形見競鑑」や「三ヶ津太夫三味線人形見立角力」などと題して、相撲番付に倣って太夫・人形遣い・三味線弾きをランク付けした摺り物が何年にもわたって刊行されている。

Ⅱ－27　京　役割番付（北側大芝居）

安政二年 (1855) 四月京都北側大芝居での人形浄瑠璃興行の役割番付。演目は「伊賀越道中双六」大序から八ツ目まで、「義経腰越状」三段目「増補かつら川」帯屋の段、「出世太平記」九つ目、「壇浦兜軍記」琴責の段。太夫は竹本長登太夫。上段に太夫と三味線の役割、下段に人形遣いの役割を載せ、絵はない。



Ⅱ－28　大坂　絵番付（竹本座）

享保十六年 (1731) 九月の大坂竹本座の人形浄瑠璃絵番付。演目は「鬼一法眼三略巻」。六つの場面が描かれている。外題と座名のみで役割等は書かれていない。この番付には年月日がないが、同板の絵番付を『義太夫年表』近世篇〈補訂篇〉では享保十六年九月「鬼一法眼三略巻」初演時のものとしているのでそれに倣う。

Ⅱ－29　京　素浄瑠璃役割番付

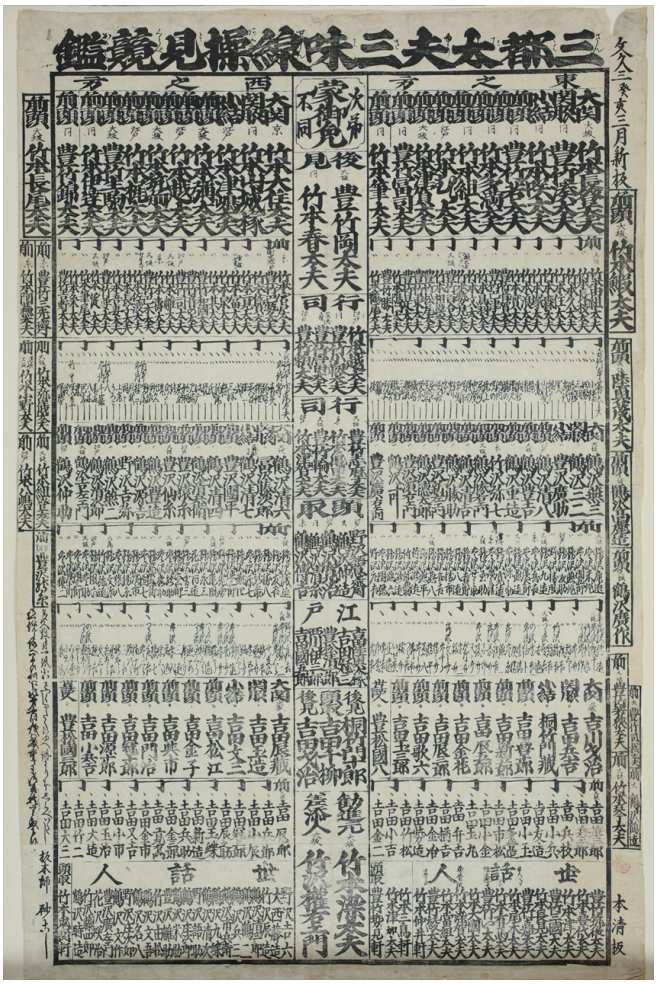
明治五年 (1872) 四月八日からの素浄瑠璃の興行の役割番付。演目名の下に太夫と三味線の名がある。大切は「壇浦兜軍記」で豊竹若太夫ほかが語っている。素浄瑠璃とは人形なしで太夫と三味線のみの上演をいう。

Ⅱ－30　京　素浄瑠璃役割番付（長楽亭）

素浄瑠璃の役割番付。上演は天保六年 (1836) 後半から天保七年 (1837) 前半のいつか。上演年の推定は『義太夫年表』近世篇〈天保～弘化〉(八木書店) による。「来ル十五日より」とあるので宣伝のための辻番付の一種。長楽亭は京都竹屋町堀川東入にあった。ここでの素浄瑠璃の番付は外に天保六年正月のものが二種残っている。

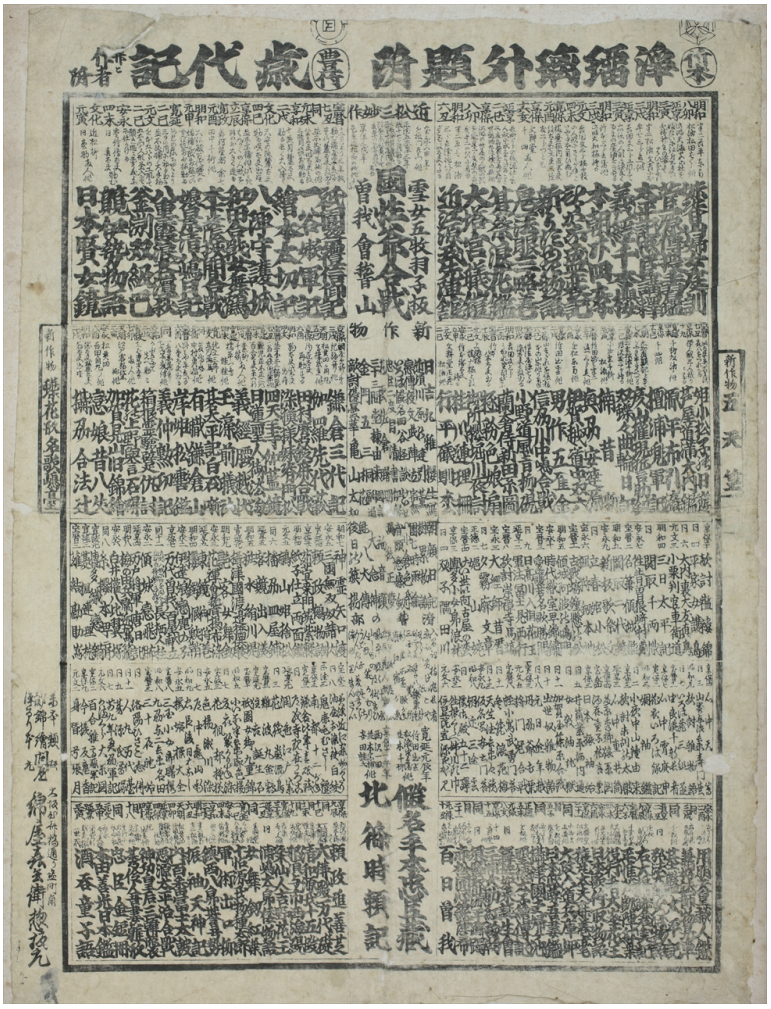
Ⅱ－31　大坂　辻番付（北堀江市の側芝居）

寛政元年五月の大判縦型の浄瑠璃辻番付。演目は「博多織恋錦(はかたおりこいのおもに)」。船の帆に外題を書くという意匠になっている。右上には豊竹座の定紋。座本は豊竹此母、名代は豊竹此太夫。右端に「近日より北堀江市の側芝居ニ而新浄瑠璃」とあり、菅専助作の浄瑠璃「博多織恋錦」初演の際の辻番付である。



Ⅱ－32　三都太夫三味線操見競鑑

相撲の番付に倣って、浄瑠璃の太夫・三味線・人形遣いの格付けを示した見立番付。文久三年三月新板。中央上に相撲の番付同様「蒙御免」とあり下に「後見」「行事」「頭取」が続き最後に「勧進元」竹本染太夫、「差添人」竹沢権右衛門。太夫の大関は竹本長登太夫（東）と竹本大住太夫（西）、三味線は鶴澤燕三（東）と鶴澤清六（西）、人形遣いは吉川才治（東）と吉田辰蔵（西）。こうした浄瑠璃の見立番付は近代まで毎年のように摺られた。

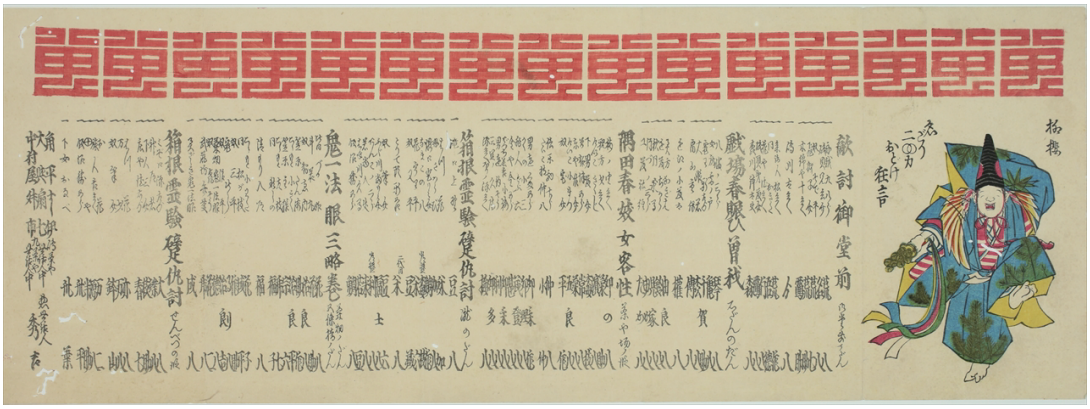


Ⅱ－33　竹本豊竹浄瑠璃外題附歳代記并作者附

同じく相撲の番付に倣って、浄瑠璃の演目を並べた見立番付。ただし大関・関脇・前頭のような格はなく、各演目の上演年とコメントを記し、文字の大きさで格を示している。中央上段にひときわ大きく「国性爺合戦」とありその左右に「雪女五枚羽子板」「曽我会稽山」が並び上に「近松三妙作」とあり、相撲の番付で「勧進元」「差添人」が書かれる場所には「仮名手本忠臣蔵」と「北条時頼記」が並ぶ。現代の浄瑠璃作品に対する評価との差異が面白いともいえる。

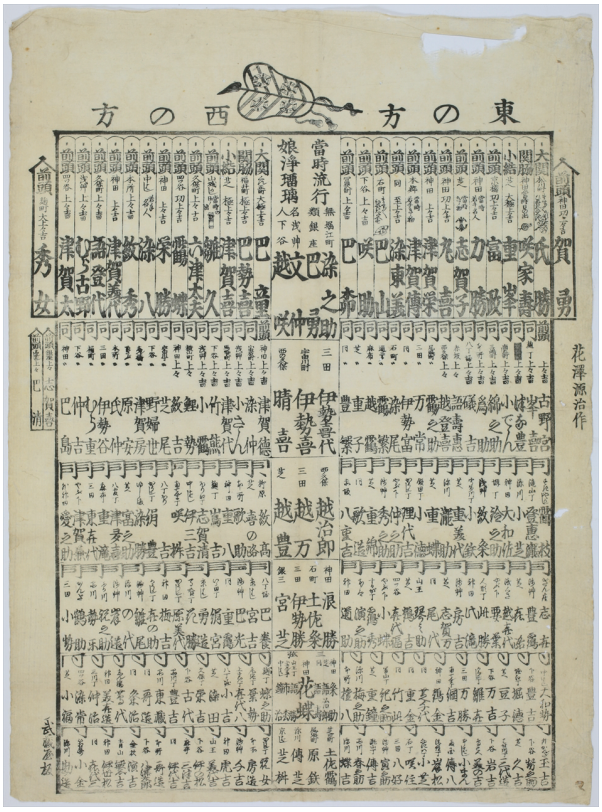
Ⅱ－34(参考) 江戸
生人形興行摺物

目黒不動尊の境内で三月上旬より開帳に合わせて行われた生人形の興行を宣伝する摺物。生人形とは見世物の一つで、等身大の人間そっくりに作られた人形で、芝居の一場面や実際に起きた事件の場面などを仕組んで見せた。興行の年は不明であるが、「人形細工人」の秋山平十郎は幕末に浅草などで生人形の興行をしていたことが知られている。「忠臣蔵夜討」「加賀見山」「目黒比翼塚」「曽我五郎」の人形が出たらしい。



Ⅱ－35(参考)
にわか番付

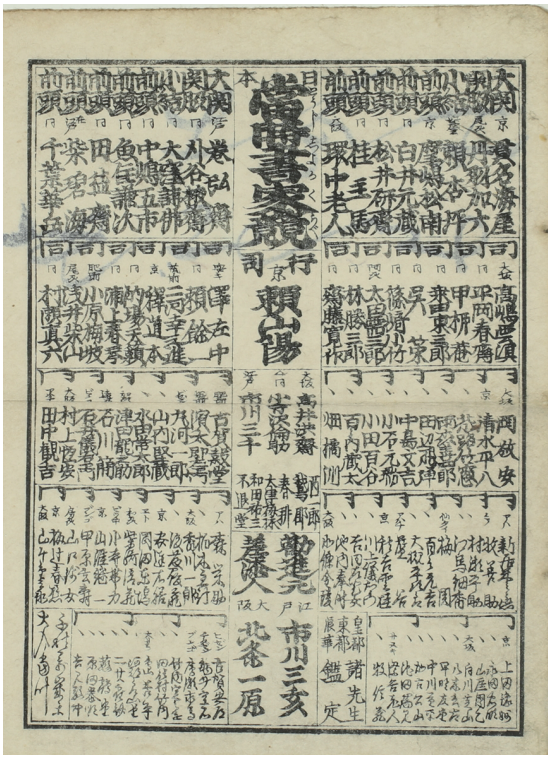
にわか狂言の役割番付。演目と役割が書かれている。にわか（俄・二〇カ・二輪加）は、素人が演じた滑稽な即興芝居で、遊郭などで行われた。大坂では早くから素人ではなく専門の俄師によって行われるようになる。彼らは近代になると大坂の新喜劇を形成していくことになる。展示している番付は、いつ・どこで行われた時のものかは不明である。



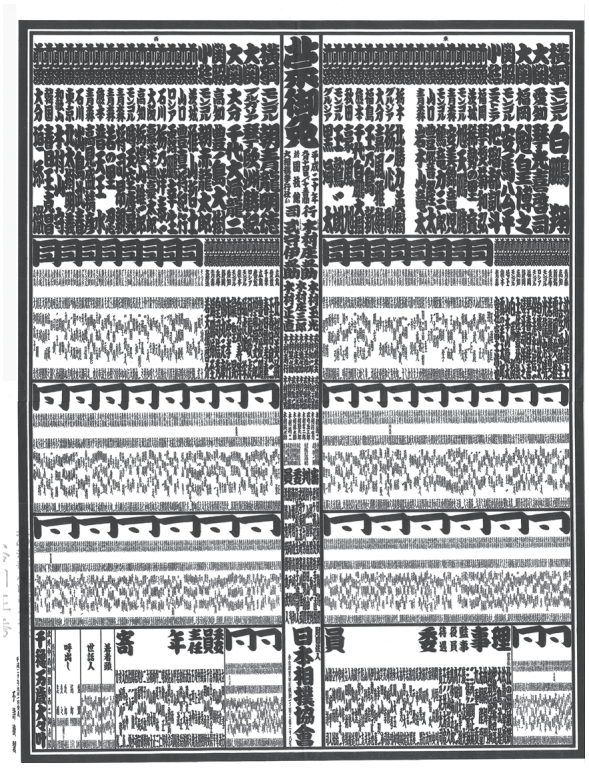
Ⅱ－36　当時流行
娘浄瑠璃見立番付

相撲の番付に倣って娘浄瑠璃（女義太夫）の格付けをした見立番付。名前の上に書かれている住所はいずれも江戸の地名である。武蔵屋版。

Ⅱ－37(参考)　当時書家競



相撲番付に倣った見立番付は、様々な事象を位付けして作られたが、これは江戸時代の書家達の位付けである。行事に頼山陽、勧進元は市川三亥、差し添え人は北条一原である。頼山陽は近世後期の思想家、漢詩人。能書家であった。市川三亥は市河米庵のこと。米庵は江戸唐様派の大家で幕末三筆の一人。



Ⅱ－38（参考）相撲番付

平成二十年九月場所の番付。中央には一番上に「蒙御免」とあり、その下に期間と場所、行司、審判委員の名前が並ぶ。左右には横綱以下の力士の名前。下段になるにつれて字が小さくなり、同じ段の中では左へ行くにつれて字が小さくなる。

「古典芸能と番組・番付
—宣伝・案内・見立—」目録
（2019年3月11日～4月25日
神戸女子大学古典芸能研究センター展示室）

2019年3月25日公開
編集　神戸女子大学古典芸能研究センター
（展示企画・図録作成担当）
Ⅰ　能・狂言　非常勤研究員　長田あかね
Ⅱ　歌舞伎・浄瑠璃　同　川端咲子
〒650-0004
神戸市中央区中山手通二丁目23-1